

特集

「観光の研究と実務に役立つ図書館」 を目指して

ごあいさつ

事務所移転と「旅の図書館」リニューアルにあたりまして 志賀 典人……1

特集

1 新しい「旅の図書館」のご案内 久保田 美穂子……2

2 「旅の図書館」蔵書の紹介 大隅 一志……8

コラム:「観光イメージを記憶する印刷メディア」 木田 拓也……17

コラム:旅の図書館への期待—観光研究者の立場から 大野 正人……19

3 公益財団法人日本交通公社がお薦めする

「一度は読みたい観光研究書&実務書100冊」 大隅 一志……20

講評の会—選定にあたって 溝尾 良隆/梅川 智也/久保田 美穂子/大隅 一志

4 人と情報、地域をつなぐ図書館

—図書館との連携で広がる観光まちづくりの可能性 福永 香織……34

5 旅心を誘う、旅の本のレジェンド30選 荒木 左地男……39

特集あとがき 久保田 美穂子……47

観光研究レビュー

JTBFモバイル観光客アンケートによる
地域の健康診断の実践 中島 泰……49

活動報告 「平成28年度観光地経営講座」を開催 岩崎 比奈子……53

連載 当財団専門委員

I 私の研究と観光 第6回

自然保護地域における保全と利用 熊谷 嘉隆……55

II わたしの1冊 第6回

『津軽』 太宰治著 根本 敏則……57

出版物のご案内・当財団からのお知らせ



日本交通公社ビル外観



旅の図書館 ライブラリープラザ (1F)

ごあいさつ

事務所移転と「旅の図書館」リニューアルにあたりまして

公益財団法人日本交通公社 会長

志賀 典人

公益財団法人日本交通公社は、本年7月に竣工いたしました南青山の日本交通公社ビルへ移転し、8月22日より業務を開始いたしました。また長らく休館いたしておりました「旅の図書館」につきましても同所に移り、10月3日にグランドオープンを迎えることができました。これもひとえに皆様のご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

既にご案内のとおり、当財団は2012年（平成24年）、創業100年を迎えた年に「公益財団法人」に移行し、長期経営計画「22ビジョン」のもと、「旅行・観光分野における実践的な学術研究機関」を目指すことといたしました。お陰様で、本年4月には、文科科学省から「学術研究機関」の指定を受けることができました。

また同ビジョンでは、こうした事業活動を支えるため、経済環境の激しい変化に対応できる財務基盤の安定をもう

ひとつのテーマに掲げ、検討の結果、当財団の資産ポートフォリオの変更を行うことといたしました。その一環として南青山に新たな社屋を建設し、財務基盤の安定を図るとともに、実践的な学術研究機関としての活動拠点を構築することに至りました。

この拠点をベースに、観光産業や観光地の経営、実務に携わっている皆様、そして研究者の皆様が、集い交流する研究ネットワークの形成に資するプラットフォーム的な役割を果していきたいと考えております。

この機に際し改めて、当財団職員一同、観光に関する研究活動と旅の図書館の運営を通じ、公益財団法人としての社会的な役割を着実に果たしてまいり所存ですので、一層のご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

（しが のりひと）

「観光の研究と実務に役立つ 図書館」を目指して

新しい「旅の図書館」のご案内

公益財団法人日本交通公社 観光文化情報センター長／旅の図書館長

久保田 美穂子

1

コンセプトは 「観光の研究と実務に 役立つ図書館」

「旅の図書館」の新しいコンセプトは、「観光の研究と実務に役立つ図書館」です。観光を研究している方・学んでいる方、観光政策の立案、観光産業や観光地の経営や実務に携わっている方、あるいは広く観光に関する動向や歴史に興味をお持ちの方に「ご利用いただけたら」と考えています。

収蔵方針を一部変更し、学術的実践的な専門性の強化を図ることとしたため、全ての蔵書の見直しを行い

ました。また新たに、今回の移転に伴い当財団の調査研究部門が収集してきた統計や公開可能な調査研究報告書なども蔵書として集約し、蔵書規模は約6万冊となりました。

さまざまな文献から、研究の種類を、多くの参考事例から観光政策や観光地づくりの「現場に活かすヒント」を探すために、足を運んでいただけたらと思います。

なお、このたびのリニューアルは、運営主体である公益財団法人日本交通公社の長期経営計画に基づき、組織を挙げて取り組んできたもので、コンセプト設定の背景などは後述します。

独自の図書分類と 専門性・希少性の高い 蔵書の公開

今回のリニューアルにあたっては、専門性、希少性の高い蔵書の公開についての工夫を行いました。その一つは、観光研究図書に関する独自分類の導入です。

一般的な公共図書館や大学図書館は通常、広範な分野の資料を取り扱いますので、一般的な分類方法として日本十進分類法（NDC）というものを使っていますが、当館のように特定分野に集中して図書を収蔵している専門図書館においては、収

「旅の図書館」は、2015年（平成27年）10月1日から約1年間の閉館期間を経て2016年（平成28年）10月3日、東京駅八重洲口から港区南青山へと場所を移してリニューアル開館しました。

本年7月に落成しました南青山の「日本交通公社ビル」内に開館し、当財団の調査研究部門とともに、これまで以上に専門性を高めて新たな機能の発揮に取り組めます。

本特集は移転後最初の発刊になりますことから、「旅の図書館リニューアル開館記念号」としました。

特集1では、このたびの移転・リニューアルに込めた想いと新しい「旅の図書館」の特徴をまとめ、併せて具体的な利用方についてご案内します。

【これまでの旅の図書館】

「旅の図書館」は、1978年（昭和53年）、「テーマのある旅を応援する図書館」として財団法人日本交通公社が、八重洲第一鉄鋼ビル1階に開設したものです。開館当時の名称は「観光文化資料館」で、当時から「旅の図書館」という愛称も使われていましたが、1999年、正式に「旅の図書館」へと改称しました。

開設の理念としては、当時の当財団西尾壽男会長が「観光はそれ自身が文化であり、その観光文化を向上させたい」という言葉を残しています。また開設時のパンフレットのキャッチコピーは「大きな旅、豊かな旅へ」「旅立ち前の“旅立ち”」でした。

世界各国から集めた図書・地図・資料約1万点、新聞・雑誌を約70種類集めて無料で公開し、その後、旅行の下調べに必要な図書をという要望に応じて、日本各地、世界各国の旅行ガイドブック、時刻表、旅行関連雑誌、紀行文など、旅行に役立つ資料を充実させました。蔵書数は約3万5千冊規模（雑誌を除く公開

図書のみ）となり、多い年には年間3万7千人の皆様にご利用いただくようになりました（1995年）。

2002年（平成14年）には専門図書館協議会へ加盟し、図書館に求められる専門性などについて模索しながら、「旅の図書館講座」など、図書館を会場とするセミナーや講座の開催、蔵書の中からテーマを決めての特別展示などにも取り組みました。

2012年以降、より学術的な専門性を高めようと、観光研究の専門書や学術書の収集に力を入れ、貴重な資料のデジタル化や古書・稀観書の閲覧の開始、学術ジャーナルの購読・公開などを開始し、2014年（平成26年）からは、閉館後の図書館を利用して、「たびとしょCafe」という少人数でゲストを囲み、双方向の情報・意見交換のできるミニ研究会を主催してきました。

2015年（平成27年）10月以降、移転のため休館し、2016年10月、南青山でリニューアルオープンしました。

表 旅の図書館の歩み

年	主なできごと
1978年	「観光文化資料館」を開設（東京駅八重洲北口、第一鉄鋼ビル1F）
1979年	来館者数が1万人
1980年	開設2周年記念「第1回文化講演会」講師：井上靖氏「シルクロードの旅から」
1982年	開設3周年記念「第2回文化講演会」講師：松本清張氏「古代史の旅」
1984年	来館者数が10万人を突破
1996年	第一鉄鋼ビル1Fから第二鉄鋼ビル地下1Fへ
1997年	来館者数が50万人を突破
1999年	名称を「旅の図書館」へ改称
2000年	蔵書を広く公開することを目的に増床
2001年	ホームページリニューアルに合わせてインターネット蔵書検索システムを導入
2003年	観光文化セミナーを開催（2011年まで全13回）
2006年	旅の図書館講座を開講（2011年まで全10回）
2008年	開設30周年記念講演会 講師：旅行作家 山口由美氏「だから世界の旅は面白い」、ドイツ文学者・エッセイスト 池内紀氏「旅する心」
2010年	来館者数が80万人を突破、館内での特別展示を開始
2012年	第二鉄鋼ビル地下1Fから八重洲ダイビル地下1Fへ移転
2015年	移転準備のため一時閉館（10月～）
2016年	南青山の日本交通公社ビル内へ移転、リニューアル開館（10月）

資料：『創業1912年から1世紀 創発的進化へ向けて ～調査研究専門機関 50年の歴史～（公益財団法人日本交通公社50年史）』（2014年、公益財団法人日本交通公社）より筆者作成、更新

蔵資料のほとんどがその一つの分野に集約されています。

そこで、今回初めて独自の分類に取り組みました。

体系的な分類に適した十進分類法の長所を活かしつつ、観光分野に特化した収蔵資料の特徴に対応するため、このたび、観光研究資料（T分類）、財団コレクション資料（F分類）、基礎文献（NDC分類）の3つの分類方法を導入しました。これにより、管理運営面はもちろんです。ご利用の皆様にとっても目的の図書・資料がよりわかりやすくお探しいただけるようになりました。分類の詳細については特集2をご参照ください。

またこのたびのリニューアルに伴い、主に明治、大正、昭和初期に発行された貴重な資料（古書・稀覯書）の公開性を高めました。当館では、外国の観光政策を日本語に訳した戦前の本、明治期の日本国内の温泉や観光地の様子を記した文献、あるいは昭和初期の日本の観光魅力を英語で紹介したガイドブックなど、国内外の政府組織や旅行・観光産業

界が発行、活用してきた貴重な資料を所蔵しています。

これまでは保管スペースの事情等により予約限定で閲覧いただいていたが、今回新たに書誌データを整理し、専用書架を設置して、来館時の公開性を高めました。

希少性の高い資料ですので閲覧には申請が必要ですが、当時のデザインや装丁などはぜひご覧いただきたいと考え、当館1F他館内での企画展示も行っています。

当財団および現在の株式会社ジェイティービーの原点でありますジャパン・ツーリスト・ビューローが発行していた雑誌「ツーリスト」（1913年創刊）や、日本で最も長く続いた旅行雑誌「旅」（1924年創刊）についてはこれまでどおり、専用端末にてデジタルコレクションを閲覧いただけます。

知見やネットワークを共有する観光の研究・情報プラットフォーム

「日本交通公社ビル」には100

人規模のシンポジウムが開催可能な「ライブラリーホール」を設けました。

図書のある空間の魅力を活かし、書架に隣接したホールや会議室を使用して、「たびとしょCafe」（図書空間でつなぐ&楽しむ研究交流）を合言葉に、ゲストスピーカーと参加者が気軽に語り合える場として2014年度から主催）他各種研究会、シンポジウムなど、観光の研究や実務に携わる皆様が集まり交流できる機会を増やします。

図書館の運営にとどまらず、本年4月に発足した「観光文化情報センター」が中心となって、「旅の図書館」と当財団の調査研究部門がこれまでに得た知見やネットワークをより多くの皆様と共有し、さまざまな情報や人との出会いが生まれる場を創出していきたく考えています。

このように、これからの「旅の図書館」では、気軽に人が集まる場となることを大切にするため、静けさを重視するのではなく、ブックカフェのように自由で創造的な想像力を刺激される居心地の良さを目指し

た空間づくりを行いました。

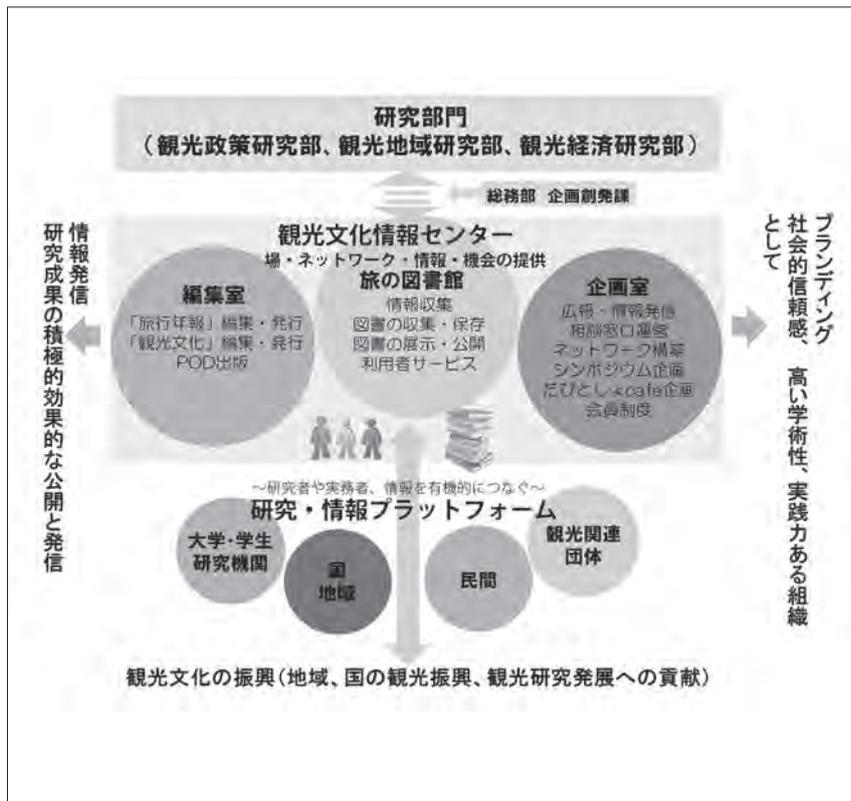
また、スライディングウォール（移動壁）などを活用した柔軟な空間利用を行い、ライブラリーホールの一部であるライブラリー会議室Bエリアや1階のガーデンラウンジコーナーは通常、「旅の図書館」の閲覧スペースとしてご利用いただけるようにしました。

実践的学術研究機関の図書館として

このように今回の「旅の図書館」リニューアルは単なる移転ではなく、収蔵方針の変更とコンセプトの再設定を行い、さらには「図書館」としての運営にとどまらない新たな機能発揮をも志したものです。

その背景は次の通りです。
公益財団法人日本交通公社は、2012年（平成24年）の公益法人認定を機に10年後の組織の方向性や活動について、全職員が検討会議に参加し、2022年（平成34年）を目標とする「22ビジョン」という長期経営計画を策定しました。
国家的戦略として観光の重要性

図1 観光文化情報センターの役割



が増す中、当財団は、「観光分野における実践的な学術研究機関」として、国や地域の諸課題に対する解決力を発揮できる組織となることを目標として掲げ、この4年間、取り組みを進めてきました。

調査研究部門は、この「22ビジョン

ン」に基づき、学術論文の執筆や国際的な学会への発表機会を増やし、本年4月、文部科学省より「学術研究機関」の指定を受けています。「旅の図書館」もまた同ビジョンに沿い、実践的学術研究機関の一翼を担う専門図書館としての取り組み

を進めてきた次第です。

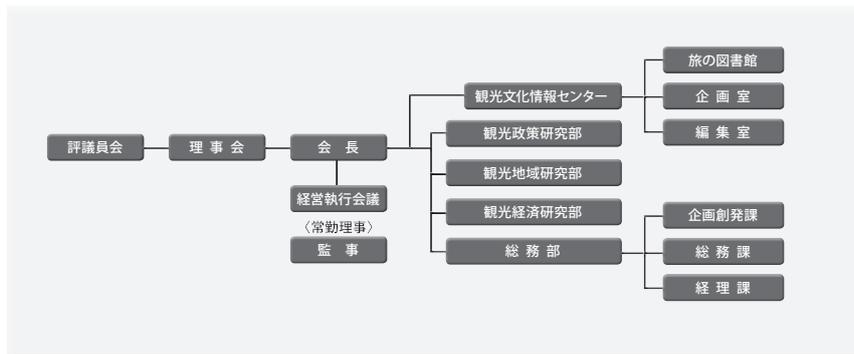
【観光文化情報センターの発足】

組織としては本年4月、「観光文化情報センター」という部門を発足させました。「観光文化情報センター」は、「旅の図書館」を中心として「編集室」と「企画室」からなり、図書館運営に加えて、調査研究部門と連携し、ホームページや出版物を通じた情報発信とネットワーク構築を担っています。

「旅の図書館」の再開をきっかけとして、「図書空間のある日本交通公社ビル」を活かし、観光の研究や実務に携わる皆様が集まり交流できる機会を増やし、ハード・ソフトともに「観光の研究・情報に関するプラットフォーム」という役割を果たしていきたいと考えています。

以上のように、「旅の図書館」は今回のリニューアルにあたり、収蔵方針や運営に関する変更を行いました。しかし、「観光文化の振興に資する」という開設理念は変わりません。どうぞこれまで以上に「旅の図書

図2 公益財団法人日本交通公社組織図 (2016年4月1日現在)



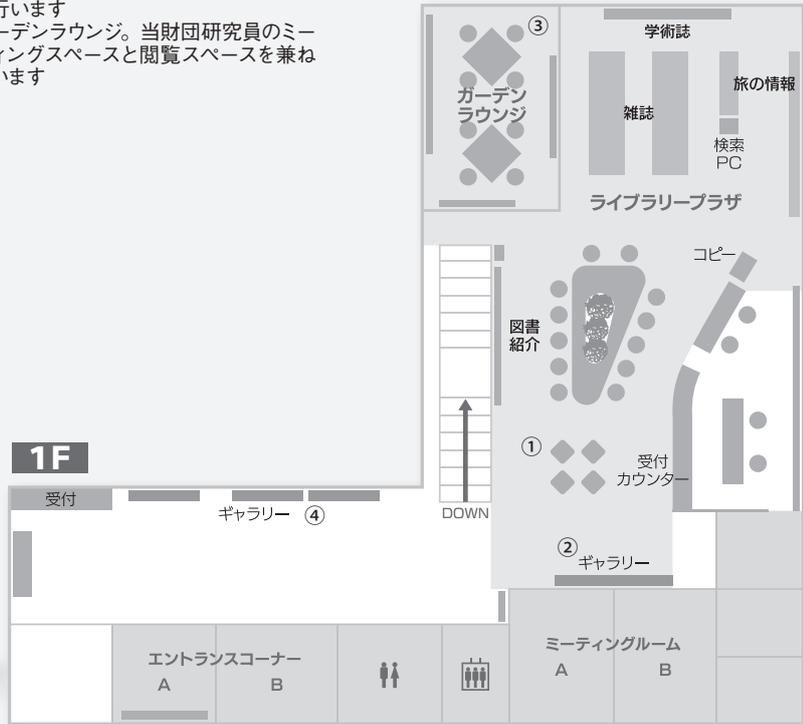
館」をご活用いただき、また、シンポジウムや研究会などへの参加を通じて、観光を取り巻く幅広い情報の読み解きや意見交換の場に、ぜひとも積極的にご参加ください。

(くぼた みほこ)

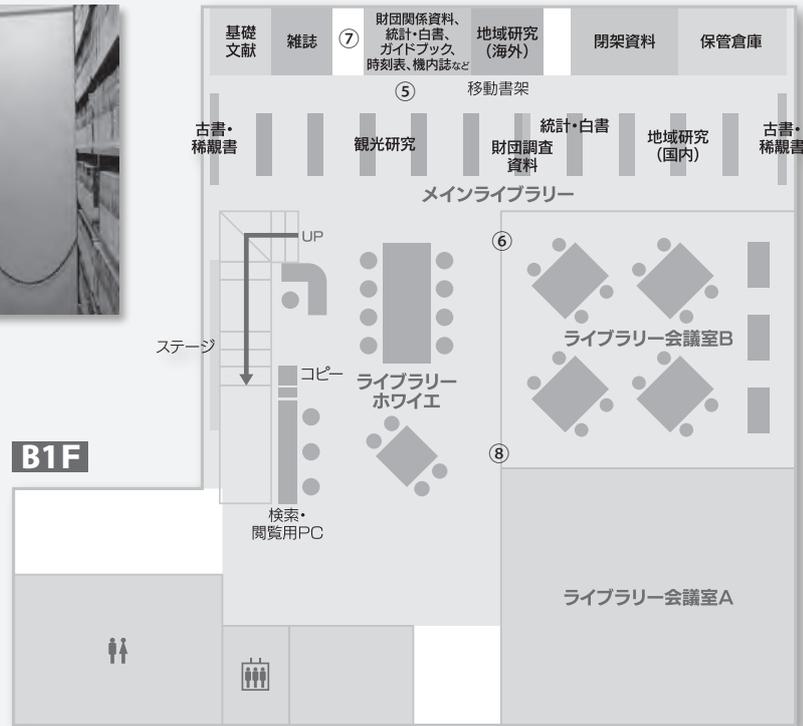


- ① 開放的な空間のライブラブラー。雑誌架を中心に旅の情報コーナーなど新しい情報が豊富
- ② 古書・稀観書は1Fを中心に企画展示を行います
- ③ ガーデンラウンジ。当財団研究員のミーティングスペースと閲覧スペースを兼ねています

④ エントランスゾーンには、ギャラリーを設け、当財団の自主研究を中心に企画展を実施します(写真は「観光資源の評価に関する研究(展示期間:2016/10/3~12/30)」)



- ⑤ 独自分類によるメインライブラリーの書架
- ⑥ ライブラリー会議室B。通常は閲覧にご利用いただけます
- ⑦ ガイドブックや時刻表のバックナンバーは移動書架へ収納。開架資料と閉架資料があります
- ⑧ ライブラリーホール全体では研究会などを開催します



「旅の図書館」ご利用案内

〈開館日・休館日など〉

- 開館時間：月曜日～金曜日／10:30～17:00
 - 休館日：土曜日・日曜日・祝日・毎月第4水曜日・年未年始
- ※上記以外の臨時休館のお知らせはホームページをご覧ください。

※シンポジウムや各種会議開催などによる臨時休館、開館時間やご利用可能スペースが変更になる場合がございます。旅の図書館のホームページや館内にて最新の情報をご案内いたします。

- 入館料：無料

〈ご利用方法〉

館内のご利用にあたっては、1F受付カウンターにてご利用の手続きをお願いします。

●1Fのみご利用の方

- ①受付カウンターで利用申請書にご記入ください。
- ②利用者証をお受け取りください。
- ③退館時に利用者証を受付カウンターにご返却ください。

- ②利用者証（セキュリティカード付）をお受け取りください。
- ③退館時に利用者証（セキュリティカード付）を受付カウンターにご返却ください。

※たびとしょカードについて

本館を繰り返しご利用いただく場合は「たびとしょカード」が便利です。カードをご提示いただくだけで毎回の利用申請書への記入が不要になります。
・カード発行手数料や年会費は無料です。
・カードの発行は受付カウンターで承ります。

●全館（1F、B1F）ご利用の方

- ①受付カウンターで利用申請書にご記入ください（運転免許証、学生証など、ご本人確認ができる身分証明書をご提示ください）。

〈フロアマップ〉（右ページ）

1Fでは、主に当財団の刊行物・出版物や学術誌、雑誌、ガイドブック、新着図書など、観光の新しい情報を提供しています。

B1Fには、観光研究・地域研究資料をはじめ、統計資料、古書・稀覯書、ガイドブックや時刻表など主要な図書・資料を収

蔵しています。専用端末にて海外の観光関連学術誌（5誌）が閲覧できます。

B1Fのご利用は入室用のセキュリティカードが必要です。

B1Fのライブラリー会議室Bエリアは、通常は閲覧スペースとしてご利用いただけます。

〈資料の閲覧〉

- ・本の館外貸し出しは行っておりません。
- ・古書・稀覯書の他、古い時刻表の一部、統計資料の一部は

閉架資料です。閲覧申請紙にご記入の上、スタッフにお申し出ください（ホームページからの申請も可能です）。

〈お願い〉

- ・館内には、ふた付きの飲み物はお飲みいただけます（食事は不可）。
- ・写真撮影は原則禁止です。
- ・携帯電話のご利用については、マナーモードに設定の上、通話は1Fエントランス・ギャラリーエリア、B1Fエレベーター周辺でご利用ください。
- ・館内は禁煙です。
- ・1FとB1Fにコピー機がございます。著作権法に定められた範囲でご利用いただけます。料金は白黒20円、カラー50円です。
- ・パソコンはお持ち込みいただけます。



〈アクセス〉

〒107-0062 東京都港区南青山二丁目7番29号 日本交通公社ビル
東京メトロ銀座線、半蔵門線、都営大江戸線「青山一丁目」5番出口から徒歩3分
TEL: 03-5770-8380 Email: tabitosho_info@jtb.or.jp

「旅の図書館」蔵書の紹介

2

公益財団法人日本交通公社 旅の図書館副館長・主任研究員

大隅 一志

「旅の図書館」は、旅行・観光に関する図書・資料だけを集める国内でも数少ない専門図書館です。蔵書の収蔵方針や資料分類の考え方、蔵書の概要および特徴的な図書・資料についてご紹介します。

① 蔵書の収蔵方針と分類方法

① 収蔵方針

1978年（昭和53年）の開設以来、「旅の図書館」では、世界各国の旅行ガイドブックから観光研究の専門書・学術書まで、多様な利用者層に応えられる図書・資料を幅広く収集してきました。

新たな図書館では、学術研究機関である当財団本部との一体化を機

に、これまで調査研究活動の中で収集してきた資料を統合し、より観光の研究者や実務者向けの専門資料の充実を図り公開をすることとし、以下のような収蔵方針の見直しを行いました。

【収蔵方針見直しの方向】

- ・観光の研究・実務の参考に資する
— 図書・資料を重点的に収蔵する。
- 観光・旅行に関する文献・研究書・実務書、調査研究報告書、観光統計資料、学術誌・研究雑誌 など（当財団の刊行物・出版物、公開可能な調査研究報告書などを含む）
- ・旅行および観光地に関する資料

は、調査研究に必要な最新情報を得ることを目的に厳選して収集する。古い資料については、過去をさかのぼった調査研究のための文献、アーカイブ資料としての価値を考慮し資料を選別し、長期的に収蔵する。

— ガイドブック、地図・パンフレット、観光地の旅行案内・観光地事情、時刻表、機内誌、旅行雑誌 など

② 図書・資料の分類

移転前までの「旅の図書館」における図書・資料の分類では、公共図書館や大学図書館などが一般的に用いる日本十進分類法（NDC）を用

図1 収蔵資料の3つの分類方法

T分類（観光研究資料） 独自分類		F分類（財団コレクション資料） 独自分類		NDC分類（基礎文献）	
【対象】観光研究分野の専門図書・資料		【対象】財団関係資料及び特徴的な収蔵資料		【対象】観光・旅行に関わる基礎的文献	
T0	観光原論・概論	F0	財団（JTBF）関係資料	0	総記
T1	観光者・観光活動（Ⅰ）	F1	JTB関係資料	1	哲学
T2	観光者・観光活動（Ⅱ）	F2	統計・白書	2	歴史
T3	観光地・観光資源（Ⅰ）	F3	ガイドブック	3	社会科学
T4	観光地・観光資源（Ⅱ）	F4	旅行商品/パンフレット	4	自然科学
T5	観光産業	F5	時刻表・機内誌	5	技術・工学
T6	観光計画・開発	F6	古書・貴重資料	6	産業
T7	観光政策	F7	映像・デジタル資料	7	芸術・美術
T8	観光経営・経済	F8		8	言語
T9	観光と社会・文化・環境	F9	保存資料	9	文学

*分類名については、広義の意味での「観光」を前提とする

いてきました。リニューアル後の新たな図書館では、蔵書の特徴を踏まえつつ、より観光の専門性に対応させるため、以下のような2つの独自分類を含む3つの分類方法を用いて管理しています(図1)。

① T (Tourism) 分類：観光研究資料

② F (Foundation) 分類：財団コレクション資料(当財団が所蔵する特徴的な資料)

③ NDC分類：観光・旅行に関わる基礎文献

2つの独自分類の詳細は、(2)以降の主な資料の分類・種別の蔵書紹介の中で解説します。

③ 蔵書数

「旅の図書館」の蔵書数は、3つの分類別に見ると、

・ T分類(観光研究資料)：約8000冊

・ F分類(財団コレクション資料)：約2万7000冊(保存資料を含む)

・ NDC分類(観光・旅行に関わる基礎文献)：約1万3000冊

となり、全体では雑誌などを含めて

約6万冊の蔵書規模となります。これら資料の分類別・種別の蔵書数の内訳は表1の通りです。以下、資料の分類・種別ごとに蔵書の概要を紹介します。

表1 資料の分類別・種別蔵書数(2016年9月現在)

種別	蔵書数(冊数)	備考	
観光研究資料(T分類)	8,000	地域研究資料として配架分を含む	
財団コレクション資料(F分類)	財団(JTBF)関係資料	4,500	27,000
	JTB関係資料	700	
	統計・白書	3,000	
	ガイドブック	6,000	
	旅行商品パンフレット	200	
	時刻表・機内誌	5,000	
	古書・貴重資料	2,300	
保存資料	5,000		
基礎文献(NDC分類)	13,000	雑誌バックナンバー合本を含む	

(注) 各分類蔵書には一部非公開を含む

(2) 観光研究資料(T分類)

観光学は、単一の学問ではなく、歴史学や地理学、社会学、人類学、心理学、経営学、経済学、統計学、都市計画学など、あらゆる既存の学問領域を使って観光の諸現象を分析・研究するもので、極めて学際的な性格を持つており、観光に関する研究図書もさまざまな領域に及んでいます。

こうした多岐にわたる観光研究資料を分類する場合、一般的に用いられる日本十進分類法(NDC)では、第一次区分「6(産業)」↓第二次区分「68(運輸・交通)」↓第三次区分「689(観光事業)」と、第三次区分の一つに集約されてしまい、詳細な分類には適用できません。したがって、観光研究資料の分類には、それに対応した分類が必要ですが、我が国ではまだ観光学の体系が十分に確立されていないことから、当財団では約1年をかけた十進分類法を用いた観光研究資料に対する独自分類「T(Tourism)分類」を構築しました。

T分類では、T0~T9までの第

一次区分(大分類)のもと、さらに第二次区分(中分類)を行い、より詳細な分類が必要なものについては第三次区分まで設定しています(表2)。今後は、運用を図りながら、必要に応じて適宜見直しを行っていく予定です。

現在、これらT分類によって登録されている観光研究資料は約8000冊。国内外の観光研究の専門書をはじめ、官公庁や当財団を含む研究機関などの調査研究報告書などがあります。以下、第一次区分別に、主な図書・資料の概要を紹介します。

■ 観光原論・概論(T0)

観光学に関する原論・概論(観光用語や事典などを含む)、観光・余暇・レジャーの概念や本質に関するもの、国内外の旅・観光の歴史や文芸(紀行・文学など)、観光の理論など、観光学の基本となる資料群で構成しています。

■ 観光者・観光活動(T1・T2)

観光者(旅行者)の視点から分類したもので、「T1(観光者・観光活動(I))」では観光者の行動・

表2 観光研究資料 (T分類) の体系

第一次区分	第二次区分	備考 (T番号は第三次区分)
T0. 観光原論・概論	T00. 概論・総論	観光論・観光学全般、観光用語 など
	T01. 観光の概念	観光の概念・定義・意義、旅、余暇・レジャー など
	T02. 観光の歴史	T020. 概論・総論 T021. 観光の日本史 T022. 観光の世界史
	T03. 観光と文芸	観光に関わる文学・紀行・作家 など
	T04. 観光理論・研究	観光理論、観光研究組織 など
	T09. 観光原論・概論その他	
T1. 観光者・観光活動 (I)	T10. 概論・総論	観光者の分類・特性、観光 (旅行) の形態 など
	T11. 観光者の行動・心理	観光発生論、観光欲求・観光動機、観光行動論 など
	T12. 観光活動全般	観光対象と活動の分類 (種類)、観光活動の動向 など
	T13. 自然・スポーツ・レクリエーション	登山、海水浴、スキー、キャンプ など
	T14. 歴史・文化	文化と観光、社寺巡り、巡礼 (遍路)、宗教とツーリズム、祭り、芸術、サブカルチャー など
	T15. 遊戯・娯楽・趣味	遊び、遊園地、ゲーム、ギャンブル など
	T16. 飲食・買い物	フードツーリズム、買い物・ショッピング など
	T19. 観光活動その他	健康と観光 (ヘルズツーリズム)、マルチハビテーション など
	T20. 旅行者動向 (概論・総論)	旅行者動向全般、余暇需要 など
T2. 観光者・観光活動 (II)	T21. 日本人の旅行 (国内旅行)	日本人の国内旅行市場動向 など
	T22. 日本人の旅行 (海外旅行)	日本人の海外旅行市場動向 など
	T23. 訪日外国人の旅行 (インバウンド)	訪日外国人旅行市場動向、誘客・インバウンドの戦略 など
	T24. 国際的な旅行者動向	
	T25. 海外 (各国) の旅行者動向	
	T29. 観光者・観光活動その他	一般的な消費者 (市場) 動向 など
T3. 観光地・観光資源 (I)	T30. 概論・総論	観光地理学、観光地の分類・特性、観光地の成立・発展形態 など
	T31. 自然観光地	景勝地、自然公園、エコツーリズム、ジオパーク、自然観光地の保護と開発 など
	T32. 歴史観光地	歴史・町並み観光地、歴史的町並みの保存と再生 など
	T33. 温泉観光地	温泉学、温泉地の歴史、温泉地の再生・活性化 など
	T34. 島嶼観光地	島嶼地域の課題、離島と観光振興 など
	T35. 都市観光地	都市の魅力、都市観光・アーバンツーリズム、都市開発・市街地の活性化 など
	T36. 山・漁村・過疎地域	グリーンツーリズム、農家民宿、里地・里山の保全、農村景観、農村・過疎地域の活性化 など
	T37. リゾート	バンス、リゾートの概念、保養地、リゾート法、リゾート計画論、リゾート開発 など
T4. 観光地・観光資源 (II)	T40. 観光資源論	観光資源の概念・分類、観光資源評価 (手法)、観光資源の保護と開発 など
	T41. 世界遺産	世界遺産と観光、世界遺産登録地の動向・課題 など
	T42. 産業遺産・産業観光	産業遺産と観光 (ヘリテージツーリズム)、産業観光 など
	T43. 認定地域その他	世界農業遺産、無形文化遺産、日本遺産 など
	T44. 観光インフラ (全般)	社会基盤全般 など
	T45. 観光インフラ (土木・建築)	道路、河川、運河、橋梁、ダム、建築 など
	T46. 観光インフラ (公園緑地・環境)	公園、都市緑地、水辺空間 など
	T47. 観光インフラ (情報)	情報技術、情報媒体、観光案内所、観光標識 など
	T49. 観光地・観光資源その他	
T5. 観光産業	T50. 概論・総論	観光産業全般、観光業界の動向、観光事業論・観光ビジネス など
	T51. 旅行業	旅行業の歴史、旅行ビジネス、旅行業の動向 など
	T52. 運輸 (交通) 業	T520. 概論・総論 T521. 航空業 T522. 鉄道業 T523. 船舶・海運業 T524. 自動車産業 T529. その他
	T53. 宿泊業	宿泊業の諸形態、宿泊業の歴史、旅館業法、宿泊施設の計画・開発・経営 など
	T54. 飲食・土産物業	T540. 概論・総論 T541. 飲食業 T542. 土産物業
	T55. MICE産業	ミーティング・インセンティブ産業、イベント産業、コンベンション産業、展示会産業 など
	T56. 観光レクリエーション事業	T560. 概論・総論 T561. 観光施設 T562. 商業施設 T563. スポーツ&レジャー (全般) T564. ウィンタースポーツ T565. アウトドア T566. エンターテインメント T567. キャンブル T569. その他
	T57. ガイド業	通訳ガイド、地域ガイド など
	T59. 観光産業その他	
T6. 観光計画・開発	T60. 概論・総論	観光計画全般、観光開発と計画 など
	T61. 観光調査	観光調査、観光地診断・観光地評価、観光の需要予測 など
	T62. 観光地計画	観光計画・観光地づくりの手法、広域・都道府県・市町村の観光計画 など
	T63. 観光レクリエーション施設計画	観光レクリエーション施設・観光交流拠点の計画 など
	T64. 観光交通計画	交通需要調査、観光交通計画、観光ルート開発、観光街道 など
	T65. 観光地の景観計画	景観論・風景論、観光地の景観・風景計画、景観とまちづくり など
	T66. 観光開発	観光開発史、観光開発の手法、観光開発と保護 など
	T67. 観光地づくり	観光地の活性化・再生、着地型観光、観光まちづくり など
	T69. 観光計画・開発その他	
T7. 観光政策	T70. 概論・総論	観光政策全般
	T71. 日本の観光政策	T710. 概論・総論 T711. 観光政策 (国土交通省・観光庁) T712. 観光政策 (総務省) T713. 観光政策 (経済産業省) T714. 観光政策 (文部科学省) T715. 観光政策 (環境省) T716. 観光政策 (農林水産省) T719. 観光政策 (その他)
	T72. 都道府県・市町村の観光行政	市町村の観光施策、ディスティネーションキャンペーン (DC)、地域間交流 など
	T73. 国際観光政策	国際観光の問題、国際レベルの観光政策、国際観光協定・条約、国連開発、国際協力 など
	T74. 海外 (各国) の観光政策	各国の観光政策・諸制度など 発展途上国の観光政策 など
	T75. 国際交流	国際観光交流 など
	T79. 観光政策その他	
	T80. 概論・総論	
T8. 観光経営・経済	T81. 観光経営 (全般)	観光経営 (観光ビジネス) 全般 など
	T82. 観光マーケティング	マーケティング論、ホスピタリティとマーケティング、観光 (誘客) 宣伝・PR、観光のブランディング など
	T83. 観光事業の経営	サービスのマネジメント、観光事業の労務・財務 など
	T84. 観光人材・組織	T840. 総論・概論 T841. 観光人材の育成 T842. 観光組織 T849. その他
	T85. 観光地経営	観光地経営論、観光地マネジメントの手法、観光地ブランディング、観光財源、官民協働 など
	T86. 観光経済 (全般)	観光産業・観光ビジネスと経済、国際旅行収支、雇用と所得、観光金融・観光投資 など
	T87. 観光統計・経済波及効果	観光統計手法、観光消費額、観光の経済波及効果 など
	T89. 観光経営・経済その他	
	T90. 概論・総論	
T9. 観光と社会・文化・環境	T90. 概論・総論	地域社会全般 など
	T91. 観光と地域社会・文化	観光人類学・観光民俗学 (風俗・風習、民俗芸能、伝統産業、郷土料理など)、地域 (地元) 学、エコミュージアム など
	T92. ユニバーサルツーリズム	障害者・高齢者と旅行、観光のバリアフリー、ユニバーサルツーリズム など
	T93. 観光とボランティア	観光とボランティア、ボランティア・ツーリズム、社会貢献活動、メセナ など
	T94. 災害と観光復興	震災と観光復興、ダークツーリズム など
	T95. 観光と環境	持続可能な観光、環境負荷の低減、環境指標、自然再生エネルギー など
T99. 観光と社会・文化・環境その他		

心理や各種観光活動、「T2(観光者・観光活動(Ⅱ))」では日本人の国内旅行・海外旅行、訪日外国人の旅行(インバウンド)、海外(各国)の旅行者動向など、主に旅行市場の動向に関するものを扱っています。

なお、T2では、旅行市場の動向分析などを行った研究資料を主としており、統計的なデータや資料については、「F分類(F2:統計・白書)」で扱っています。

■観光地・観光資源(Ⅲ・T3・T4)

観光地・観光資源に関する資料について、2つの第一次区分を用いて分類しています。「T3(観光地・観光資源(Ⅰ))」では、特に観光地理学的な視点から自然観光地、歴史観光地、温泉地、島嶼、都市、農山漁村・過疎地域などの観光地タイプに分類し、リゾートを加えました。ここでは、各観光地タイプの発展過程や観光地としての諸課題、観光地づくりなどに関する図書・資料を集め、自然資源、歴史・文化資源、温泉資源といった観光資源についても、関係の深い観光地タイプの中で扱っています。

また、エコツーリズム、アーバンツーリズム(都市観光)、グリーンツーリズムといった観光の潮流として登場してきた各種テーマのツーリズムについても、関係の深い観光地タイプの中を含めています。

「T4(観光地・観光資源(Ⅱ))」では、観光資源論の他、世界遺産や産業遺産などの認定地域、および土木・建築、公園緑地・環境、情報などの観光基盤(インフラ)に関するものを扱っています。

■観光産業(Ⅳ・T5)

旅行業、運輸(交通)業、宿泊業、飲食・土産物業、MICE産業、観光レクリエーション事業、ガイド業などの観光産業の業種別に、各産業の特性や歴史、業界動向、関連制度、事業・ビジネスなどに関するものを扱っており、最も多くの蔵書があります。このうち、運輸(交通)業、飲食・土産物業、観光レクリエーション事業については、第三次区分により詳細分類を行っています。

■観光計画・開発(Ⅴ・T6)

観光の調査・計画・開発に関する資料群で、当財団が長年関わってきた

観光地の調査・計画や観光地づくりなど調査研究活動の中で収集してきた資料をはじめ、観光交通計画や景観計画に関する資料があります。

「観光地計画(T62)」には、観光計画の手法や計画論に関する資料の他、都道府県や広域、市町村などが策定した観光振興計画資料(報告書)もあります。「観光地づくり(T67)」には、観光地の活性化や観光まちづくりなどに関するさまざまな施策や取り組み事例などに関する資料も多く、観光地の実務の参考としてご利用いただけます。

■観光政策(Ⅵ・T7)

日本の観光政策、都道府県・市町村の観光行政、国際レベルや海外各国の観光政策などに関する資料を扱っています。

特に日本の観光政策については、我が国の観光の基本的な政策に関する各種資料を集めるとともに、省庁別に政策や調査報告書などを分類し、各省庁の観光に関する施策の動きが分かるようにしています。

■観光経営・経済(Ⅶ・T8)

観光(観光事業)の経営や経済

に関する資料を扱っています。

このうち、観光経営については、マーケティングや観光事業・観光ビジネスの経営、観光人材・組織などにより分類しています。また観光地を対象としたマネジメントやマーケティング手法、地域のブランディングなどに関する資料は、「観光地経営(T85)」として扱っています。

観光経済に関しては、観光経済全般と観光統計・経済波及効果に関するものに区別して分類しています。

■観光と社会・文化・環境(Ⅷ・T9)

ここでは観光と関わる社会の諸事象として、観光と地域社会・文化、ユニバーサルツーリズム、ボランティア、災害と観光復興、環境などを扱っています。

「観光と地域社会・文化(T91)」は、観光人類学・民俗学的な視点から、風俗・風習や祭り・伝統行事などを通した観光と地域社会・文化との関わりについての資料を集めています。観光研究資料の独自分類を導入したことは、資料の利用管理を容易にするだけでなく、観光研究の動向を捉える上でも役立っています。例え

図3 T9. 観光と社会・文化・環境 (2011-2015年)

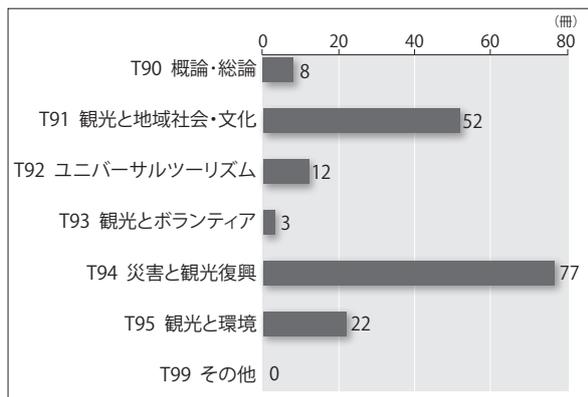
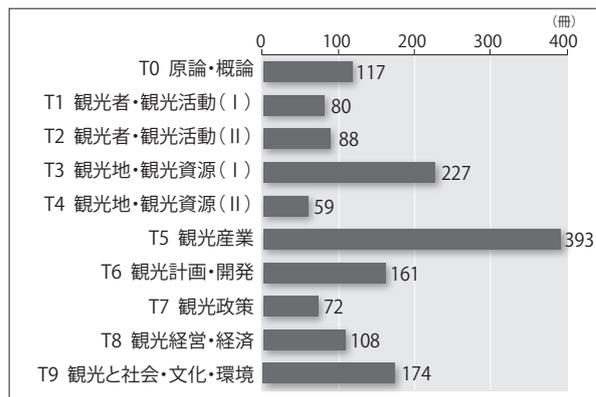
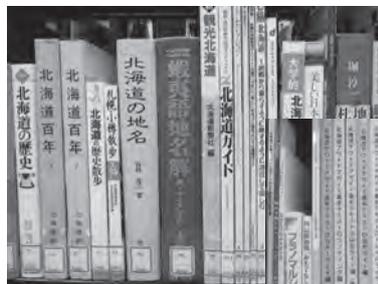


図2 第一次区分受入数 (2011-2015年)



T分類による配架資料

ば「旅の図書館」では2011年(平成23年)から2015年(平成27年)までの最近5年間で約1500冊の図書を受け入れています。このうち受入図書数が多いのは「T5. (観光産業)」約400冊、「T3. (観光地・観光資源(I))」約230冊、「T9. (観光と社会・文化・環境)」約170冊などとなっております。どのような観光研究図書が多く出版されているかが年次別に簡単に把握することができるとなりました(図2)。さらに第二次区分で見ると、例えば「T9. (観光と社会・文化・環境)」では、2011年の東日本大震災を機にして「災害と観光復興(T94)」に関する図書が最も多くなっていることが分かります(図3)。このように、分類をより詳細に、時系列的に見ていくことで、さまざまなテーマにつ



地域研究資料の例(北海道)

いて、長いスパンでその趨勢を捉えることも可能になりました。

(3) 地域研究資料

地域研究資料は、国内・海外の個別の国や地域・観光地に関する図書や資料で、観光研究資料(T分類)と地域を理解するための基礎文献(NDC分類)とで構成しています。これらの資料には、国立公園をはじめとする自然観光地や世界遺産地域、温泉地、都市や農山漁村地

域などの観光地づくりや地域の活性化など、当財団の調査研究活動を通して収集してきた地域資料や海外各国の調査資料などがあります。

また、これまで「旅の図書館」が多くの利用者にお役立ていただいたガイドブックや地域の歴史・文化、地誌、観光地事情などに関する図書資料も厳選して収蔵し、地域を深く理解いただけるようにしています。

観光地の研究だけでなく、観光地づくりや地域活性化への取り組みを行う他地域にとっても参考にしていただけます。

(4) 財団コレクション資料 (F分類)

当財団の刊行物・出版物や調査研究報告書、古書・稀覯書(きこうしょ)など、当財団の所蔵する特徴的な資料を集め、「F (Foundation) 分類」として分類・整理しています(表3)。F分類には、主に次のような資料があります。

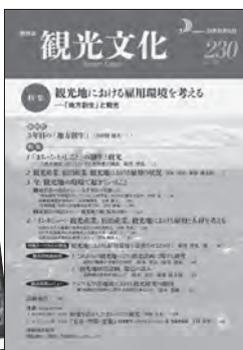
■財団(JTF)関係資料(F0)
当財団の社史や刊行物・出版物、調査研究報告書などです。

表3 財団コレクション資料 (F分類) の体系

第一次区分	第二次区分	分類に含まれる内容 (キーワード例)
F0. 財団 (JTBF) 関係資料	F00. 財団 (JTBF) 経営資料	社史、経営関係資料
	F01. 機関誌・定期刊行物	財団刊行物 (「観光文化」「旅行年報」など)
	F02. 財団出版物	財団出版物 (「美しき日本」「観光読本」など)
	F03. 外部出版物 (財団関連)	財団研究員が執筆に関わった外部出版物
	F07. 財団主要調査資料	財団の主要調査資料
	F08. 調査研究報告書	自主研究報告書・受託調査報告書
	F09. 保存資料	
	F10. 経営資料	社史 (グループ会社含む)、経営関係資料
	F11. 営業資料	営業関係資料 (JTBニュースリリースなど)
F1. JTB関係資料	F18. JTB関係資料 (その他)	
	F19. 保存資料	
	F20. 観光統計全般	国内・海外の観光に関する統計・白書・年鑑
	F21. 統計 (旅行業)	旅行業に関する統計・白書・年鑑
F2. 統計・白書	F22. 統計 (運輸・交通)	運輸・交通に関する統計・白書・年鑑
	F23. 統計 (宿泊)	宿泊に関する統計・白書・年鑑
	F24. 統計 (観光施設)	スポーツ施設を含む
	F25. 都道府県観光統計	都道府県別の観光入込統計
	F29. 統計 (その他)	社会統計 など
	F30. ガイドブック (テーマ別)	テーマ別ガイドブック
	F31. ガイドブック (国内)	国内ガイドブック (「るるぶ情報版」など)
F3. ガイドブック	F32. ガイドブック (ジャパン)	外国人向けの日本紹介ガイドブック
	F33. ガイドブック (海外)	海外ガイドブック: 「ロンリープラネット」「地球の歩き方」など
	F34. 観光地パンフレット・地図	主要観光地のパンフレット、地図
	F39. ガイドブック (その他)	
F4. 旅行商品パンフレット	旅行商品パンフレット (JTB「エース」「ルック」など)	
F5. 時刻表・機内誌	F50. 時刻表	時刻表 (バックナンバー)
	F51. 機内誌	主要航空会社機内誌 (バックナンバー)
F6. 古書・貴重資料	F60. 古書・稀観書	観光産業・政策・観光事業、ガイドブックなど
	F61. ツーリスト・旅	「ツーリスト」「旅」原書・合本
	F69. 保存資料	
F7. 映像・デジタル資料	F70. 映像資料	映像資料、デジタルアーカイブ資料 など
	F71. 録音資料	
	F72. 写真	
	F79. その他デジタル資料	
F8.		
F9. 保存資料		



温泉まちづくり研究会
「温泉まちづくり」



機関誌「観光文化」



「旅行年報」

当機関誌「観光文化」は、1976年(昭和51年)12月の創刊以来、毎年、各時代の観光のトピックを特集テーマに据え、各テーマに造詣の深い有識者の方々に執筆依頼し、多様で深奥な知見が凝縮された冊子として評価をいただけてきたもので、本号で231号を数えます。215号(2012年10月発刊)からは、観光研究分野における研究活



旅行業の歴史が分かるJTB関係資料



動の発表の場として内容を刷新し、研究員による執筆と外部専門家の方々からの寄稿による観光文化振興のための問題提起、情報提供、交流の場となっています。また、「旅行年報」(1981年〔昭和56年〕から刊行)は、前年度の観光を取り巻く旅行市場や観光産業、観光地、観光政策などに関する各種統計資料および当財団独自調査の結果をもとに、およそ一年間の動向を概観するものです。各年の旅行・観光を取り巻く動きを捉えるとともに、経年で見ていただくことで、時代の変化を読み解くこともでき、旅行・観

光の動向分析やアーカイブ資料としても活用いただけます。2014年度（平成26年度）版からは、旅行者の実態や意識調査（当財団の独自調査）やアジア8地域・訪日外国人旅行者の意向調査（日本政策投資銀行との共同調査）などの結果も加え、内容の充実を図っています。

その他、当財団が50年余りに及ぶ各種調査研究活動の中で成果として取りまとめた報告書も数多く、自主研究を中心に公開可能な調査報告書については、観光の研究や観光政策・観光地づくりなどの実践の場での参考として活用いただけるよう公開しています。

当財団の代表的な出版物については、「特集3：公益財団法人日本交通公社がお薦めする「二度は読みたい観光研究書&実務書100冊」」の中で併せてご紹介しています。

■JT B関係資料（F1）

当財団を設立母体とする旅行会社ジェイティービーの社史や各種発行物、ニュース資料などがあります。我が国の旅行業の歴史や歩みなどを知る上で参考になります。

■統計・白書（F2）

国内外の主要な観光統計をはじめ、旅行業、運輸・交通、宿泊、観光施設など観光に関連する各種統計資料の例



国内外の観光に関する統計資料の例

表4 主要な観光関連統計資料

国内の観光統計全般	<ul style="list-style-type: none"> 『観光白書』国土交通省・観光庁 『観光の実態と志向』（公財）日本観光振興協会 『大都市住民の観光レクリエーション』（公社）日本観光振興協会 『レジャー白書』（公財）日本生産性本部
日本人の海外旅行／訪日外国人旅行	<ul style="list-style-type: none"> 『出入国管理統計』法務省大臣官房司法法制部 『日本人と国際線の旅 海外旅行者調査 ON JAPANESE OVERSEAS AIR TRAVELERS』毎日新聞社 『JNTO訪日外客訪問地調査』日本政府観光局 『日本の国際観光統計』日本政府観光局 『JNTO国際観光白書』日本政府観光局 『JNTO訪日旅行誘致ハンドブック』日本政府観光局
特殊マーケットの旅行	<ul style="list-style-type: none"> 『修学旅行のすべて』・『教育旅行白書』（公財）日本修学旅行協会 『ロングステイ調査統計』ロングステイ財団 『ウィンターレジャー白書』ウィンターレジャーリーグ
国際的な観光動向	<ul style="list-style-type: none"> 『COMPENDIUM OF TOURISM STATISTICS』UNWTO 『YEARBOOK OF TOURISM STATISTICS』UNWTO 『世界観光統計資料集』アジア太平洋観光交流センター
旅行業	<ul style="list-style-type: none"> 『数字が語る旅行業』（一社）日本旅行業協会
運輸・交通	<ul style="list-style-type: none"> 『交通年鑑』・『新交通年鑑』交通協力会・交通新聞社 『鉄道要覧』（株）電気車研究会・鉄道図書刊行会 『鉄道統計年報』国土交通省鉄道局 『航空輸送統計年報』国土交通省 『航空統計要覧』（一財）日本航空協会
宿泊	<ul style="list-style-type: none"> 『宿泊旅行統計調査』観光庁
観光施設	<ul style="list-style-type: none"> 『特定サービス産業実態調査』経済産業省 『レジャーランド&レクパーク総覧』総合ユニコム（株）
都道府県の観光統計	<ul style="list-style-type: none"> 『全国観光動向 都道府県別観光地入込客統計』（公社）日本観光振興協会 各都道府県が独自に取りまとめている観光入込統計（一部非公開）
その他	<ul style="list-style-type: none"> 国民の生活や観光に関する世論調査等

（備考）出版社は現在の出版社名で記載しています

計・白書・年鑑約3000冊を揃えています。各分野別の主な統計資料は、表4の通りです。我が国では、継続的にデータを捉えることのできる観光統計が少ないことが課題です。『観光白書』『観光の実態と志向』『大都市住民の観光レクリエーション』『レジャー白書』などは30〜50年継続して刊行されており、長期的なスパンで観光の政

策の動きや統計データを捉える貴重な資料と言えます。また、当財団では、調査研究活動の一環で、各都道府県が独自に取りまとめている観光統計資料についても収集してきており、他にはない統計資料の一つです。旅の図書館では、これら資料のうち公開可能な資料をご覧いただくことができます。

■ガイドブック〈F3〉

ガイドブックは、「旅の図書館」の特徴的な蔵書の一つです。

近年のガイドブックについては、国内では『るるぶ情報版』（JTB）、海外では『ロンリープラネット』『地球の歩き方』などに限定して収蔵しています。『るるぶ情報版』はおおむね2000年以降の全てを収蔵しており、『ロンリープラネット』『地球の歩き方』は5年ごとに保存しています。これらのガイドブックは、最新の旅行情報源としてだけでなく、掲載情報（テーマ、キーワード、写真など）から観光地や観光の変化を捉えるなど観光研究のアーカイブ資料としても活用いただけます。

また外国人向けに日本を紹介するガイドブックについては、「ガイドブック（ジャパン）（F32）」として分類し配架しており、インバウンドを研究する上でも参考にさせていただきます。

なお、戦前の国内外のガイドブックも数多く所蔵しており、特に戦前のジャパン・ツーリスト・ビューローの時代のガイドブックなどからは、

ガイドブックの歴史や変遷を見ることができます（古書・貴重資料〈F6〉参照）。



ガイドブックの例

■旅行商品パンフレット〈F4〉

ジェイティービーの代表的旅行商品『エースJTB（国内）』『ルックJTB（海外）』について、1990年代以降のツアーパンフレットを取

り揃えています。時代とともに変化する旅行テーマや旅行スタイル、観光地の変化などが、旅行商品を通して見ることができます。



■時刻表・機内誌〈F5〉

時刻表も特徴的な蔵書の一つです。最も古い時刻表は1872年（明治5年）『品川横浜館鉄道列車出発時刻および賃金表』。ジェイティービーが発行する時刻表は1973年（昭和48年）1月号以降は全て所蔵しています。古い時刻表は閉架資料で、申請によって閲覧いただけます。

機内誌については、JAL、ANA、エールフランスなど国内および日本に就航している海外航空会社より寄贈いただいている機内誌（約40誌）を取り揃えています。

海外航空会社の機内誌の日本紹介記事などからは、外国人旅行者に日本がどのように紹介されているかを知る上で参考になり、インバウン



時刻表



機内誌



ドの研究にも役立ちます。

■古書・貴重資料〈F6〉

【古書・稀観書】

主に戦前（おおむね1940年代以前）を中心にした観光に関する貴重な文献コレクション約2300冊を所蔵しています。我が国で最初の外客誘致・斡旋機関として発足したジャパン・ツーリスト・ビューロー（当財団およびジェイティービーの前身）の生みの親である木下淑夫氏が収集した国内外の貴重な資料（木下コレクション）約90冊をはじめ、1880年代から1940年代の文献からは、戦前の我が国の観光産業やインバウンドをはじめとした観光政策、観光事業などの動きが分かります（表5）。

古書・稀観書は閉架資料のため、申請によって閲覧いただけます。

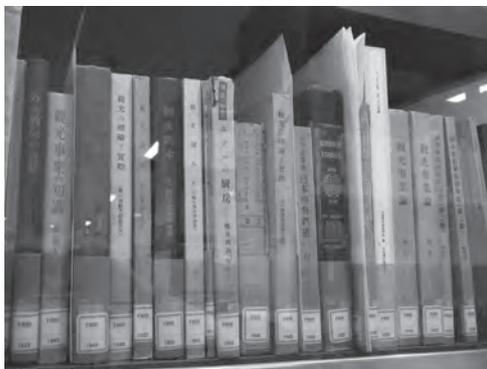
【「ツーリスト」「旅」】

1913年（大正2年）に創刊し、1942年（昭和17年）まで刊行された「ツーリスト」(Tourist)は、ジャパン・ツーリスト・ビューローの雑誌で、邦文・英文併記の特徴を持ち、

表5 古書・稀観書の概要

分類		蔵書の概要
F600	観光産業・政策・観光事業	観光産業、観光政策、観光事業、観光論 [蔵書例] 『国際観光』『国際観光情報』など
F601	地誌・観光地事情	地理、地誌、風俗風習、地域の全般的な紹介(社会情勢、生活) [蔵書例] 『日本名勝地誌』など
F602	ガイドブック・旅行案内	ガイドブック、観光地案内、旅行案内、時刻表 [蔵書例] 『Baedker's Handbook』『Cook's Traveller's Handbook』『日本案内記』『鐵道旅行案内』『外国旅行案内』など
F603	地図・パンフレット	地図、パンフレットなど
F604	旅行記・エッセイ	紀行、旅行記、エッセイ、旅行雑誌など
F605	文化・芸術	文化、芸術 [蔵書例] 『Tourist Library』など
F606	その他	

(備考) 分類はF分類 (F6) を第三次区分したもの



古書・稀観書

戦前のインバウンドに対する我が国の取り組みの動きが分かる貴重な資料の一つです。
また「旅」は、1924年（大正13年）に発刊され、日本で最も長く続いた旅行雑誌で、我が国の観光の時代変化をうかがうことができます。
これら2誌は、創刊号から、前者は終刊まで、また後者は2004年（平成16年）1月号（924号）まで図書館内で「デジタルコレクション」として閲覧することができます。



ギャラリーに展示中の古書

「観光イメージを記憶する

印刷メディア」

東京国立近代美術館 主任研究員 木田 拓也

戦前期の日本の観光ポスターに焦点を当てた展覧会「ようこそ日本へ」の開催にあたって、東京駅前

にあった「旅の図書館」（当時）に連日のように通っていたのはちょうど一年ほど前のことになる。移転作業のために「旅の図書館」が間もなく一時休館するというタイミングだったため、やや焦りを感じながらも、戦前期の貴重な資料を次々と書庫から出していただき、その蔵書を手がかりとしてかつての日本の観光イメージの展開を追跡した。

戦前期の観光キャンペーンのために制作された印刷メディアは日本のデザイン史のなかで重要な位置を占めている。というのも、昨今と同じように、一九三〇年代もまた「観光立国」をめざし、いわば国策として観光キャンペーンが

展開され、外貨獲得という大義のために観光宣伝には才能豊かなデザイナーが起用されたからだ。

戦前期の対外宣伝誌としては河野鷹思や山名文夫が表紙を手がけたグラフィ誌『NIPPON』（一九三四年創刊）が有名だが、観光関係では、例えば、ジャパン・ツーリスト・ビューローが発行した『ツーリスト』（一九一三年創刊）の表紙は三越や地下鉄のポスターで知られる杉浦非水によるものだし、国際観光局が発行した『トラベル・イン・ジャパン』（一九三五年創刊）の表紙は原弘が手がけている。当時のデザイナーにとっては、「美しい日本」を外国に向けてアピールするためのポスター、雑誌、パンフレット、カレンダーなどは思い切った仕事ができる晴れ舞台でもあった。そのため、おそらく「旅の図

書館」の書架にはデザイン的に見ても重要な作品がまだまだたくさん埋もれているに違いない。

「旅の図書館」は観光に関する資料がおそらく国内で最も充実している専門図書館であり、観光研究の拠点として今後もますます重要な役割を果たすことになるだろう。ここで部外者としてやや勝手な願望を言わせてもらうならば、ともすると美術館と図書館のはざまで行き場を失いがちなエフェメラ類——パンフレット、絵はがき、ガイドマップ、カレンダー、ポスターなど観光イメージの記憶をとどめる印刷メディアの集成にも期待したい。



木田 拓也 (きだ たくや)

東京国立近代美術館主任研究員。石川県生まれ。1993年早稲田大学第一文学部卒、文学博士。主な著書として『工藝とナショナリズムの近代 「日本のもの」の創出』（吉川弘文館、2014年）他。これまでに担当した企画展は「大阪万博1970 デザインプロジェクト」（2015年）、「東京オリンピック1964 デザインプロジェクト」（2013年）など多数。



「ようこそ日本へ：1920-30年代のツーリズムとデザイン」展
会場風景およびポスター、東京国立近代美術館、2016年2月

表6 基礎文献 (NDC 分類) の蔵書概要

区分	観光に関する主な蔵書
0類(総記)	図書館、博物館
1類(哲学)	聖地、宗教、社寺、祭礼、遍路など
2類(歴史)	国内・世界の旅の歴史(中世・近世など)、古い紀行書・旅行記、図誌・地理・地名・名所など
3類(社会科学)	歴史・民俗・芸能・伝統行事など国内・海外各国・地域の文化・社会を知るための各種文献
4類(自然科学)	山岳・河川・島・温泉・動植物など
5類(技術・工学)	土木・建築、町並み、都市、料理など
6類(産業)	国際博覧会、交通・運輸(鉄道・航空・船舶など)、宿泊、観光産業社史など
7類(芸術・美術)	世界遺産、文化財、伝統工芸、オリンピック、登山など
8類(言語)	—
9類(文学)	俳句、紀行・エッセイなど

(5) 基礎文献 (NDC分類)
 旅の歴史、民俗学、観光・旅行産業関係社史など旅行・観光の研究の参考となる基礎文献資料があります(雑誌の合本を含む)(表6)。



基礎文献の例(民俗学)

旅行産業社史



旅の歴史や旅行記などのシリーズ本



主要な観光関連学会の学会誌(学術コーナー)

(6) 学術誌・雑誌
 学術誌については、国内の主要な観光・ツーリズム関連学会の学会誌(約20誌)をはじめ、観光に関する学部や学科などを有する国内の主要な大学や研究機関の紀要(約50誌)を収蔵しています。海外学術誌は、海外電子ジャーナル(5誌)を館内で閲覧可能です。
 また雑誌については、研究雑誌、観光関係団体などの情報誌、旅行雑誌、一般情報誌、地域情報誌など約120タイトルを閲覧いただけます。



雑誌架(右)・雑誌バックナンバー(左)

「トラベルジャーナル」「観光とまちづくり(前誌:観光)」「月刊ホテル旅館」「レジャー産業資料」「地域開発」「地域づくり」など観光に関わる主要雑誌については、バックナンバーを合本して保存しており、観光関連産業や観光業界の動きや歩みを振り返ることができます。
 (おすすめ かずし)

旅の図書館への期待

―観光研究者の立場から

高崎経済大学地域政策学部 教授 大野 正人

観光研究に関する図書・資料は少なく、観光経済や観光マーケティングに関しては信頼できる統計データが出揃ったのはここ10年くらいであろうか。

このため、社会・経済と観光経営の関係性を研究する筆者の立場から見ると、社会・経済における観光のポジションを把握するのに苦労する。前者については様々なデータがあるが、それが観光にどのような影響を及ぼしたかを把握しようとする、照らし合わせるべき観光統計が無いのである。その結果、過去の観光動向の把握は、様々な業界雑誌等に表れた断片的な記事、場合によっては当時の宣伝広告記事から推し量るといふ気の長い作業となる。あるいは多くの研究者は、過去の事例分析は置

いといて、現在の動向や話題だけを追いかけて研究することとなり、「現在、こんな観光がトレンドですよ」過去の観光は間違っていましたよ」と言うスタンスとなる。しかし、観光は社会の価値観や経済の影響を映し出す鏡であることから、「何故、今までの観光はあのような姿になったのか」という要因の検証をしなければ、将来の社会経済の変化によって観光がどう変化するかを類推することは出来ないはずである。旅の図書館で過去の旅館・ホテルの動向について、雑誌のバックナンバーやホテルの社史などを紐解いてみると、当時の観光経営は間違っていたかのような視点の多くが研究不足によるものであることが理解できる。例えば、大型団体旅館が温泉街の情緒

を失わせたという批判について、その要因を社会・経済動向と照らし合わせてみると、木造旅館の火災発生率が住宅よりも高かったこと、旅行が鉄道からバス、マイカーに変化したのに対して、温泉街の駐車場整備や都市計画が対応できなかったために旅館は温泉街外縁に移転せざるを得なかったこと、そのため温泉街からの距離が遠くなり、バーやスナックを館内に取り込む方向に向かったこと、等々の原因と反省点が見えてくる。このように、旅の図書館は他の図書館では過去の資料として捨て去られているデータが蓄積されていることが強みであろう。もちろん国会

図書館に行けば同様の蓄積があるものの、旅の図書館の一覧性とは比べものにならない。そして商業出版されなかった資料こそ宝の山である。今後の旅の図書館に期待するのは、このような時系列で一貫して閲覧できる資料、特に様々な観光産業のニュースリリースや宣伝パンフレット等のストックである。さらに日本の観光がようやくグローバル化してきた現代では、諸外国の観光資料の蓄積がますます必要となる。アーカイブとしての資料の電子化も大切なことであるが、そのコンテンツの吟味こそが観光研究機関に付属する旅の図書館への期待である。



大野 正人 (おおの まさひと)

高崎経済大学地域政策学部教授。1976年東京大学農学部林学科・森林風致計画研究室卒。同年、交通公社総合開発(株)入社、リポート開発、ホテル旅館のコンサルティングに従事。1991年財団法人日本交通公社入社、観光マーケティング、宿泊産業・観光文化活性化に関する調査研究に従事。2013年より現職。

公益財団法人日本交通公社が 「一度は読みたい」 観光研究書&実務書100冊

3

公益財団法人日本交通公社
旅の図書館副館長・主任研究員
(選定メンバー代表)

大隅 一志

「人はなぜ旅をするのか」「観光がもたらす社会、経済、文化、環境への影響や効果とは?」「観光地はどう発展し、どのような課題に向き合っているのか?」「観光の諸現象を研究したり、解決策を見つけていくためには、さまざまな領域からのアプローチが必要で、観光研究が、このように極めて学際的な特性を持ちながら、研究者や実務に関わる人が日常手にする研究書や実務書は、どうしても自身の専門テーマに偏りがちです。「旅の図書館」には、観光に関わる研究書約8000冊(実務書を含む)の他、歴史や民俗学、自然科学などに関する図書、地域を知るための文献などが数多くあります。これらの図書は、過去から今日まで先人たちが記した観光についての知の集積とも言えます。少しでもこれらの図書や資料に触

れることは、自身の研究に広がりとおもしろさを持たせ、研究へのアプローチや実践への新たなヒント(種)を与えてくれるのではないのでしょうか。

しかし、こうした観光に関する膨大な図書の全てに目を通すことは現実的に不可能です。もとより、専門分野以外にどのような観光に関する優れた図書があるのか、なかなか分からないのが実情です。

そこで、「旅の図書館」の移転・リニューアル開館を機に、図書館の蔵書から、観光の研究者や実務者にとって示唆に富んだ本を選び、「一度は読みたい観光研究書&実務書」として紹介させていただきます。

選書にあたっては、当財団研究員の協力を得ながら、「旅の図書館」を中心とした選定メンバーにより、候補図書の収集・絞り込みなどの基礎作業を

行い、最終的に当財団(公益財団法人日本交通公社)として選定しました。また、選定の過程では、観光研究者であり幅広い観光分野の研究書・実務書に精通されている溝尾良隆氏(当財団評議員・立教大学名誉教授)にアドバイザーとしてご協力いただき、貴重なご助言をいただきました。次ページ以降に、当財団がお薦める観光研究書&実務書100冊をご紹介します。

これらの本は、当財団が独自分類を行った観光研究資料の分類(T分類)に基づいて、各分類・テーマごとに選定したものです。

選書の背景や考え方、選書理由などは、選定後に開催した「講評の会」の記録の中で一部ご紹介しました。今後これらの図書をお読みになる際の参考にしていただければと思います。

なお、最後に、お薦めの100冊の他に、当財団研究員が執筆に関わった研究書、実務書についても併せて紹介させていただきます。当財団の50年にわたる調査研究活動の成果であり、今後の研究や実務の参考になると思いますので、併せてお読みいただけたらと思います。



【選定メンバー】

梅川智也 理事・観光政策研究部長
久保田美穂子 観光文化情報センター長・
主席研究員
大隅一志 旅の図書館副館長・主任研究員

【アドバイザー】

溝尾良隆氏 立教大学名誉教授



リストの選定基準とプロセス

久保田 今回、旅の図書館の蔵書をもとに、当財団が薦めする「一度は読みたい観光研究書&実務書100冊」を選定しました。リストの選定に携わった方々にお話を伺いたいと思います。

溝尾さんは当財団のOBであり、ご自宅にたくさん蔵書をお持ちで数多くの本を読んでもらえることから、選定メンバーに加わっていただきました。まず、今回のリスト選定の経緯を大隅さんからお話しいただけますか。

大隅 私は3年前に旅の図書館の仕事に関わるようになって、改めて自分の読書不足を痛感しました。その反省と、図書館を運営する立場から、多くの本にできるだけ目を通すようにしました。そうした中で、もっと知られるべきだと思ふ良書に多く出会い、それらの本のリストを作成すべきでは、という問題意識を持つようになりました。

そしてこのたび、旅の図書館が移転し新しい図書館に生まれ変わるこ

とになりました。これまでの蔵書に加え、当財団の調査研究部門が収集してきた統計や公開可能な調査研究報告書、実務書も公開することになり、蔵書数も大幅に増えました。

そうしたタイミングで、梅川さんからも「財団として将来に残したい本、若い観光研究者や学生に読んでほしい本を選ぶことが必要なのは」というお話をいただき、この機会に蔵書の中から良書を選んで、きちんとリストにしようと考えたわけです。

久保田 選定基準とプロセスについて、皆さんからお話を伺いたいと思います。もともと梅川さんが作ったリストがあったのですよね。

梅川 私は「旅の意味と可能性を探る研究会」(注1)という会の幹事長をしており、その会で観光に関する図書をきちんと選ぶ必要があるというところでリストを作り始めていました。今回はそのリストがベースになっていますね。

大隅 当館は観光研究資料について「T分類」(注2)という独自の分類を



行っていますが、今回のリストもこの分類に沿ってテーマごとを選んでいきます。5段階くらいのステップを踏んで図書をリストアップしていきましたが3回目くらいの選考段階でまだ1000冊くらいありました。そこから議論を重ねて、ようやくここまで絞り込むことができました。久保田 読んでほしい対象を誰にするかというの、悩みましたね。梅川 メインターゲットは、観光研究者と観光に関わる実務者というこ

大隅 それにプラスして観光に関心の高い一般の方も意識しています。ですから、観光研究の入門書的な本も入っています。

それから、特定の国や地域を扱ったケースではなく、観光全般に共通するテーマで書かれた本をできるだけ選ぶようにしました。1人の著者につき1冊を原則とし、同じ著者で何冊も選ばないようにしています。また、当財団で発行している本は別に紹介するということで、基本的にこのリストからは外しました。

時代を映す本、時代を超える本

溝尾 まず古典的な基本がしっかりしている本から、読むべきでしょう。1930年(昭和5年)に、初めて「国際観光局」という観光の担当部署ができ、当時、今と同じくインバウンドを増やして、日本の経済を活性化させる必要があった。参考にした海外の研究書を国際観光局で翻訳したのです。

それが1934年(昭和9年)に

発行された『観光経済学講義』です。1941年(昭和16年)に発行された『観光事業論』も、やはり国際観光局が翻訳したものです。戦後間もない頃、やはり経済復興で日本の研究者が書いている観光事業論もこれらの本を参考にしています。1981年(昭和56年)に復刻された1930年発行の『観光学概論』と併せて、これらは今も観光を学ぶ基本と言えます。

大隅 観光の基礎3部作という位置づけですね。その中で我々としては、『観光学概論』を1冊リストに入れました。

溝尾 余暇論についても、定番とされる3冊があります。カイヨワの『遊びと人間』、デュマズディエの『余暇文明へ向かって』、ホイジンガの『ホモ・ルーデンス 人類文化と遊戯』ですね。この3冊は一連の流れをくむものであり、セットで読んでほしいと思います。

梅川 余暇に関しては、1989年(平成元年)に発行された荒井政治の『レジャーの社会経済史』も、イギリスの産業革命以降の余暇政策を

よくまとめています。

溝尾 シーグフリードの『現代—二十世紀文明の方向』も古い本ですが、第5章の「遊覧旅行の時代」は、現代の観光研究者にとって重要なことを言っていると思います。

梅川 当時は時代を席卷する名著だったけれど、今の時代には合わないという本もあります。しかし歴史の意義を考えて、リストに入れた本もいくつかありますね。

溝尾 ブーアスティンの『幻影の時代』マスコミが製造する事実』もそういう位置づけになりますね。

1964年(昭和39年)の発行です。最近注目されているデイーン・マツカネルの理論も、ブーアスティンを批判しているからです。そういう流れを知る上でも、『幻影の時代』は読む価値があります。

梅川 ラック計画研究所の『観光・レクリエーション計画論』も1975年(昭和50年)に発行された当時は、我々にとってバイブル的な存在でした。観光計画を作る時のいわば教科書のような存在でした。現代はもうそういう形で使われてはいませんが、

当時の観光計画のあり方などを知る意味で重要な本なので、若い方々には読んでほしいですね。

溝尾 書かれたのはずいぶん前ですが、現代に通用する本もあります。

1972年（昭和47年）に書かれた『観光農業への招待』などがそうですね。1960年代、70年代に盛んだった観光農業に取り組み時には、みんなこの本を参考にしていました。

六次産業化と最近よく言われていますが、観光と農業に関する本について、未だにこれを超えるものはないと思います。

大隅 事業・経営の方法論までとても丁寧に書かれていますので、今回リストに入れさせていただきました。
久保田 そういう本の存在は今、改めて伝えたいですね。

都市論、民俗学…… テーマ別の選択

梅川 テーマ別で言うと、都市分野が内外で出版数が多く、リストが少し多くなってしまったのですが、1961年（昭和36年）発刊のジェ

ーン・ジェイコブスの『アメリカ大都市の死と生』は、一見観光とは関係なさそうですが、都市の魅力について4つの条件が挙げられていて、現代にも十分通じる部分があると思います。選定したものです。

溝尾 路地や古い建築物を残せとかね。都市問題は、地域をどうつくるかというベーシックな部分で観光に関わりませんから。

梅川 宇沢弘文の『社会的共通資本』も、コモンズとしての観光の重要性について指摘している本ですね。創造都市に関しては、チャールズ・ランドリーやリチャード・フロリダが有名ですが、比較的分かりやすく解説している佐々木雅幸の『創造都市への展望』を選定しました。

久保田 具体的な事例紹介の本も何冊か選びましたね。

大隅 『証言・町並み保存』がそうですね。角館や妻籠、石見銀山、竹富島などの町並み保存の経緯が保存活動に関わった地元のリリーダーを通して分かりやすく紹介されています。
溝尾 『自由時間都市』もフランスの国家としての余暇・観光政策とラ

ングドック・ルシヨン地方のリゾート開発の事例を詳細に紹介している、素晴らしい本ですね。日本のリゾート法がなぜ問題になったかも、フランスの政策と比較するとよく分かります。

梅川 今まで、当財団の調査研究部門では民俗学や歴史の本が少なかったのですが、今後はこれらの分野もカバーしていく必要があるというところで、宮本常一と柳田国男の著書を選びました。それぞれ立ち位置が違いますが、観光にも関わりが深い民俗学の書籍です。

溝尾 佐野眞一が書いた『旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三』もリストに入れましたね。宮本常一の地域に対する姿勢がよくわかります。

近年に出版された書籍の評価

大隅 過去10年ほどの間に出版された本については、評価についてかなり悩みましたね。本としてはもちろん、取り上げられているテーマも、数年経って見たら残らないものかもしれない。しかし今読むべきだと思

われる本、現段階では読んでほしいという本もリストアップしています。
溝尾 新しい本は選ぶのがとても難しいですね。相当悩まれたのではないかと思います。

梅川 現代アートは今、地域活性化に大きな影響を与えています。そのきっかけとなったのが越後妻有の「大地の芸術祭」です。先駆者である北川フラムの『美術は地域をひらく…大地の芸術祭10の思想』は、リストに入れるべきだと思いました。





産業遺産についての本は何冊かありますが、加藤康子の『産業遺産』を選びました。

溝尾 『復興ツーリズム・観光学からのメッセージ』という本をリストに入れましたが、これも今日的なテーマですね。

航空論の本についてはたくさん出版されていますが、「旅の図書館」の蔵書に限れば、『最新 航空事業論』がよく目配りされていると思います。もう一冊は『航空産業入門』

ですが、後者がオーソドックスな基礎編としたら、前者はいわば応用編で日本航空の経営悪化のことも書かれています。この2冊を読めば、航空論はカバーできるのではないかと思いますね。

久保田 宿泊の事例本としては『帝国ホテルのおもてなしの心』『俵屋の不思議』が選ばれています。特にこの2冊は溝尾さんから強く推薦いただきましたが、その理由は？

溝尾 特に『俵屋の不思議』は、京都の老舗旅館、俵屋で使われている畳や障子の糊や和紙、生け花などをどういう人に頼んでいるかを書いています。高野槇の浴槽を洗う、専門の「洗い屋」もいるそうです。京都の各分野の一流の職人たちによって江戸時代から続く旅館が成り立っており、旅館が、減びてしまう地域の大事な業種や仕事と深く結びついているのがよく分かります。

旅の図書館の今後に向けて

〜何を残すか

久保田 それでは最後に、旅の図書

館の新たなスタートにあたって溝尾さんから何かメッセージやアドバイスがありましたら、お願いします。

溝尾 蔵書は「捨て方」が難しいですね。廃棄のプロセスとフローチャートを明確にすることが大事だと思います。昭和30年より前に発行された本は残すとか、新刊本は3年間利用する人がいなかったら、全社員に公開の上、廃棄にするといったルールを決めるといいと思います。

大隅 ガイドブックなども、過去にさかのぼって研究に使えるものについて選定し、5年おきに保存するなどの収蔵方針を決めました。

溝尾 それはいいことだと思います。私は『新日本ガイド』というJTBのガイドブックシリーズを作るのに関わりましたが、初版と最終版をとってあります。

例えば初版は神戸の紹介ページがすごく少ないんですが、最終版では大幅に増えています。神戸観光のウェイトが歴史的にどう推移したかを見ることが出来ます。四万十川も初版には全然出てこないのに、最終版では囲みで紹介されているなど、変化



選定された100冊は「旅の図書館」1階に展示されている

が読み取れます。観光の研究材料として使えるので、機械的に捨てるのではなく、何を残すかを考えるのは大事だと思います。

久保田 そうでないとい、その時々担当者の判断になってしまいますものね。ちゃんと廃棄のルールを作っておくことは大事ですね。

溝尾 もう一つは、利用者からのフィードバックを受け取る仕組みを作った方がいいのではないかと思いますね。何に興味があってその本を選んだのか、読んでみて良かったところ、期待外



溝尾良隆（みぞお よしたか）
立教大学名誉教授。理学博士。公益財団法人日本交通公社評議員。群馬県出身。東京教育大学理学部地理学専攻卒業。1964年株式会社日本交通公社外人旅行部に入社、1969年財団法人日本交通公社へ移籍。1989年立教大学社会学部観光学科教授。観光学部教授、観光学部長、日本観光研究学会会長を歴任。



梅川智也



久保田美穂子



大隅一志

れだったところなどを指摘してもらったため、付箋を付けて返してもらったか。いい部分はコピーしてファイリングするとかね。

久保田 本の内容について、利用者の評価などを聞くことも面白いかもしれないですね。とはいえ、そういうことをやっている専門図書館はあるのでしょうか。

大隅 以前は旅の図書館でも、利用者アンケートを実施して来館目的などを聞いていました。図書館の新しい運営方向が定まってからはそこまですていいないです。

溝尾 普通の図書館はやらないうちか。

うけど、調査研究機関が運営する図書館だからこそできるのでは。これもまた調査の一つですよ。来館者がどんなことに興味があるか、知りたいじゃないですか。

今回作られたリストに関しても、来館者から「この本が入っていないけど、入れたほうがいい」とか「この本はなぜ入れたのか」などの意見や質問があれば、聞き取ってストックしておく、再検討材料にして、よりよいものにしていけばいいのではないのでしょうか。

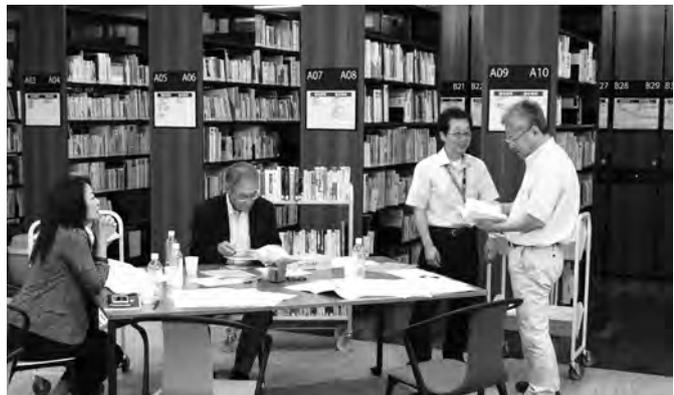
久保田 おっしゃる通り、このリストは今後とも充実させていきたいと思

います。今日は溝尾さんからいろいろと貴重なご意見をいただきました。どうもありがとうございます。

(注1) 旅の意味と可能性を探る研究会：
<http://www.trip.t.u-tokyo.ac.jp/tabikenkyukai/home.html>

(注2) T分類：観光研究資料に対する旅の図書館の独自分類。Tourismの頭文字からT分類とした。

(※) 著者の敬称は省略しました。



一度は読みたい観光研究書&実務書100冊



観光の理論と実際
(第一回観光講座全集)
東京都総務局観光課編
1949年
東京都総務局観光課



観光学概論 (復刻版)
A・ホルマン 著
国際観光局 訳
1981年 (初版は1930年)
橋書院

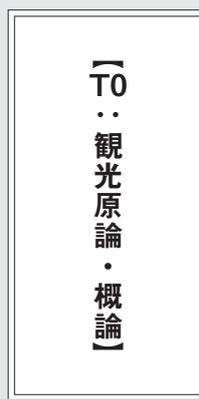


現代観光論 (新版)
鈴木忠義 編
1984年 (初版は1974年)
有斐閣

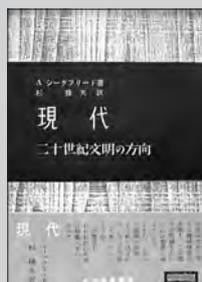


観光学
基本と実践 (改訂新版)
溝尾良隆 著
2015年 (初版は2003年)
古今書院

言論・概論



TO...観光原論・概論



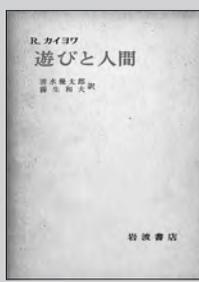
現代 二十世紀文明の方向
A・シーグフリード 著
杉 捷夫 訳
1956年
紀伊國屋書店



ホモ・ルーデンス
人類文化と遊戯
J・ホイジンガ 著 高橋英夫 訳
1963年 (写真は1971年
発行の普及版) 中央公論社



余暇文明へ向かって
J・デュマスディエ 著
中島 巖 訳
1972年
東京創元社



遊びと人間
R・カイヨワ 著
清水幾太郎・霧生和夫 訳
1970年
岩波書店



レジャーの社会経済史
荒井政治 著
1989年
東洋経済新報社

余暇・旅・観光



旅行ノススメ
白幡洋三郎 著
1996年
中央公論社



社会的共通資本
宇沢弘文 著
2000年
岩波書店



レジャーの誕生
アラン・コルバン 著
渡辺響子 訳
2000年 藤原書店



観光・旅の文化
北川宗忠 著
2002年
ミネルヴァ書房



観光のまなざし (増補改訂版)
ジョン・アーリ/ヨナス・
ラーソン 著 加太宏邦 訳
2014年 (初版は1995年)
法政大学出版局



旅行用心集
八隅蘆菴 著
今井金吾 解説
1972年 (初版は1810年)
八坂書房



旅の文化誌—ガイドブックと
時刻表と旅行者たち
中川浩一 著
1979年
伝統と現代社



余暇の戦後史
石川弘義 編著
1979年
東京書籍



グランド・ツアー
良き時代の良き旅
本城靖久 著
1983年
中央公論社



トマス・クック物語
ピアーズ・ブレンドン 著
石井昭夫 訳
1995年
中央公論社

歴史

一度は読みたい観光研究書&実務書100冊



旅する巨人
宮本常一と渋沢敬三
佐野眞一 著
1996年
文藝春秋



星の巡礼
パウロ・コエーリョ 著
山川紘矢・山川亜希子 訳
1998年
角川書店 (初版は1995年)



完訳 日本奥地紀行2
新潟一山形一秋田一青森
イザベラ・バード 著
金坂清則 訳注
2012年 (初版は1880年) / 平凡社

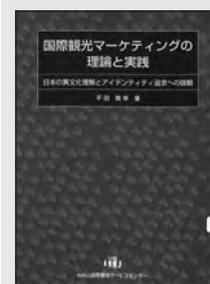
観光と文芸 (文学)



海外観光旅行の誕生
有山輝雄 著
2002年
吉川弘文館



旅の根源史
田村正紀 著
2013年
千倉書房



国際観光マーケティングの
理論と実践
平田真幸 著
2006年
国際観光サービスセンター

インバウンド



海水浴と日本人
畔柳昭雄 著
2010年
中央公論新社

活動 (自然)



幻影の時代
マスコミが製造する事実
ダニエルJ・ブーアスティン 著
星野郁美・後藤和彦 訳
1964年 (写真は1974年版) / 東京創元社



観光とサービスの心理学
前田勇 著
1995年
学文社

行動・心理

「T1・T2」観光者・
観光活動



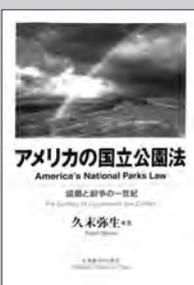
日本百名山
深田久弥 著
1964年
新潮社



エコツーリズムの世紀へ
エコツーリズム推進協議会 著
1999年
エコツーリズム推進協議会



再生する国立公園
瀬田信哉 著
2009年
アサヒビール



アメリカの国立公園法
久末弥生 著
2011年
北海道大学出版会

自然観光地

「T3・T4」観光地・
観光資源



都市のイメージ
ケヴィン・リンチ 著
丹下健三・富田玲子 訳
1968年
岩波書店

都市



ベルツと草津温泉
市川善三郎 著
1980年
あさを社



世界温泉文化史
ウラディミール・クリチェク 著
種村季弘・高木万里子 訳
1994年
国文社



新版・日本の温泉地
山村順次 著
1998年 (初版は1987年)
日本温泉協会

温泉地



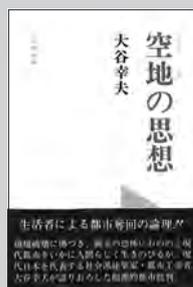
証言・町並み保存
西村幸夫・埜正浩 編著
2007年
学芸出版社

歴史観光地

一度は読みたい観光研究書&実務書100冊



街並みの美学
芦原義信 著
1979年 (写真は2001年版)
岩波書店



空地の思想
大谷幸夫 著
1979年
北斗出版



都市ヨコハマをつくる
田村明 著
1983年
中央公論社



都市再生のバラダイム
—J・W・ラウスの軌跡—
窪田陽一 編・著
1988年
PARCO出版局



都市保全計画
西村幸夫 著
2004年
東京大学出版会



自由時間都市
ビエール・ラシーヌ 著
津端修一 監訳
1987年
パンリサーチインスティテュート

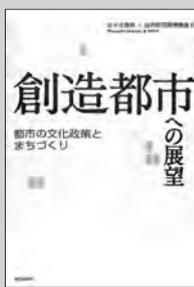


グリーン・ツーリズム
山崎光博・小山善彦・
大島順子 著
1993年
家の光協会



日本の田園風景
山森芳郎 著
2012年
古今書院

農山漁村



創造都市への展望
佐々木雅幸・
総合研究開発機構 編著
2007年
学芸出版社



アメリカ大都市の死と生
J・ジェイコブズ 著
黒川紀章 訳
1977年
鹿島出版会



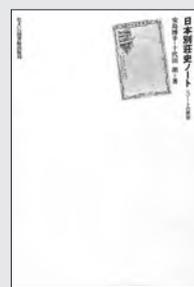
ナショナル・トラスト
木原啓吉 著
1992年 (写真は1998年版)
三省堂



軽井沢物語
宮原安春 著
1991年
講談社



東京都湯沢町
新潟日報報道部 著
1990年
潮出版社



日本別荘史ノート
安島博幸・十代田朗 著
1991年
住まいの図書館出版局



近代日本の国際リゾート
砂本文彦 著
2008年
青弓社

観光資源



道の文化
山田宗睦他 著
1979年
講談社



道の文化史
シュライバー 著
関楠生 訳
1962年
岩波書店

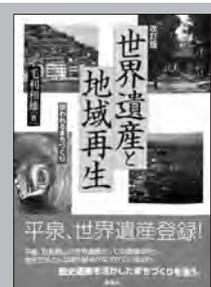
インフラ (土木)



産業遺産
加藤康子 著
1999年
日本経済新聞社



「世界遺産」の真実
佐滝剛弘 著
2009年
祥伝社



世界遺産と地域再生 (改訂版)
毛利和雄 著
2011年 (初版は2008年)
新泉社

世界遺産・産業遺産

一度は読みたい観光研究書&実務書100冊



日本交通史
児玉幸多 編
1992年
吉川弘文館

運輸・交通



旅行ビジネス入門 (第3版)
トラベルジャーナル 編
2002年
トラベルジャーナル



旅行業の扉 JTB100年の
インバージョン
高橋一夫 編著
2013年
碩学舎

旅行業



観光事業論
田中喜一 著
1950年
観光事業研究会

概論・総論

T5
観光産業



航空産業入門
ANA総合研究所 編著
2008年
東洋経済新報社



最新 航空事業論
井上泰日子 著
2013年
日本評論社



オリент・エクスプレス物語
ジャン・デ・カール 著
玉村豊男 訳
1982年
中央公論社



駅弁物語
瓜生忠夫 著
1979年
家の光協会



日本の鉄道
野田正穂他 編
1986年
日本経済評論社



帝国ホテルのおもてなしの心
帝国ホテル 編
1995年
学生社



俵屋の不思議
村松友視 著
1999年
世界文化社



基本 ホテル経営教本
鈴木博・大庭祺一郎 著
1999年
柴田書店



世界最高のホテル
プラザでの10年間
奥谷啓介 著
2007年
小学館

宿泊



豪華客船の文化史
野間恒 著
1993年
NTT出版



おみやげ
贈答と旅の日本文化
神崎宣武 著
1997年
青弓社

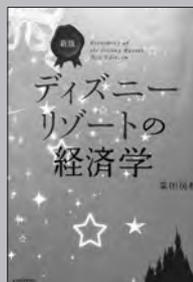
飲食・土産



観光農業への招待
藤井信雄 編著
1972年
富民協会

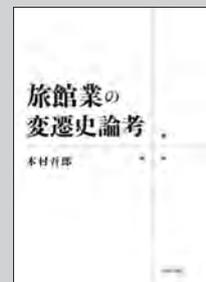


スキーと山地集落
白坂蕃 著
1986年
明玄書房



ディズニーリゾートの経済学
(新版)
栗田房穂 著
2013年 (初版は2001年)
東洋経済新報社

観光レク



旅館業の変遷史論考
木村吾郎 著
2010年
福村出版

一度は読みたい観光研究書&実務書100冊



日本風景論 (新装版)
志賀重昂 著
2014年
講談社

景観



観光・レクリエーション
計画論
ラック計画研究所 編
1975年
技報堂



観光計画の手法
日本観光協会 編
1976年
日本観光協会



観光・リゾート計画論
前田豪 著
1992年
総合ユニコム

計画

〔T6〕観光計画・開発



観光政策・制度入門
寺前秀一 著
2006年
ぎょうせい

観光政策

〔T7〕観光政策



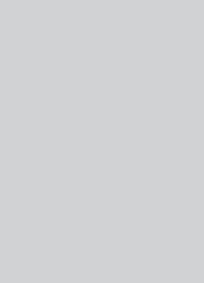
土木工学大系13 景観論
土木工学大系編集委員会 編
1977年
彰国社



日本の景観
樋口忠彦 著
1981年
春秋社



風景学入門
中村良夫 著
1982年
中央公論社



貧困克服のためのツーリズム
高寺奎一郎 著
2004年
古今書院

国際観光政策



日本列島改造論
田中角榮 著
1972年
日刊工業新聞社



観光行政百年と観光政策審議会
三十年の歩み
内閣総理大臣官房審議室 編
1980年
ぎょうせい



国土計画の変遷
川上征雄 著
2008年
鹿島出版会



観光経済学の基礎
河村誠治 著
2000年
九州大学出版会



観光の経済分析
小沢健市 著
1992年
文化書房博文社

観光経済



コトラーのホスピタリティ&
ツーリズム・マーケティング (第3版)
フィリップ・コトラー 他 著
白井義男 監修 平林祥 訳
2003年〔ホスピタリティと観光のマーケティング〕(東海大学出版会1997年刊)の改訂版
ピアソン・エデュケーション

マーケティング

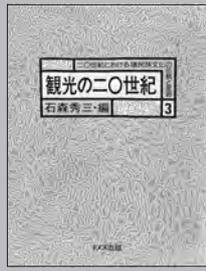


ホスピタリティマネジメント
立教大学観光研究所 編
2008年
立教大学観光研究所

観光経営

〔T8〕観光経営・経済

一度は読みたい観光研究書&実務書100冊



観光の二十世紀
石森秀三 編
1997年
ドメス出版



オリエンタリズム
エドワード・W・サイド著 板垣雄三・
杉田英明 監修 今沢紀子 訳
1993年 (初版は1896年)
平凡社



観光人類学
山下晋司 編
1996年
新曜社



遍路と巡礼の社会学
佐藤久光 著
2004年
人文書院

観光と地域社会

「T9」観光と社会・
文化・環境



復興ツーリズム
観光学からのメッセージ
総合観光学会 編著
2013年
同文館出版

災害と観光復興



忘れられた日本人
宮本常一 著
1984年 (初版は1960年)
岩波書店



遠野物語
柳田国男 著
2012年など (発表は1910年)
無明舎出版など



犬と鬼
アレックス・カー 著
2002年
講談社



当財団研究員が執筆に関わった研究書・実務書

分類(1次)	分類(2次)	タイトル	著者	出版社	出版年
【T0】観光原論・概論					
T0	原論・概論	観光読本 [第2版]	(財)日本交通公社	東洋経済新報社	2004
T0	原論・概論	観光読本	(財)日本交通公社	東洋経済新報社	1994
T0	原論・概論	現代観光用語事典	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1984
T0	原論・概論	観光の現状と課題	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1979
T0	原論・概論	観光事典	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1973
T0	原論・概論	旅行年報	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1981-
T0	原論・概論	シンポジウム採録集	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2008-2011
T0	観光の概念	余暇社会の旅	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1974
T0	観光研究	自主研究レポート	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2003-
【T1】観光者・観光活動(I)					
【T2】観光者・観光活動(II)					
T2	日本人の観光	旅行者動向	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2000-2013
T2	日本人の観光	Market Insight 日本人海外旅行市場の動向(日本語版)	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2006-2013
T2	日本人の観光	Market Insight 日本人海外旅行市場の動向(英語版)	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2009-2013
T2	日本人の観光	旅行・観光地動向ファイル	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2000-2003
T2	日本人の観光	旅行動向季報	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1978-1985
T2	日本人の観光	旅行の動向	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1974-1978
T2	日本人の観光	旅行の見通し	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1988-2007
T2	日本人の観光	旅行の現状と見通し	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1978-1980
T2	日本人の観光	JTBレポート	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1989-2001
T2	日本人の観光	JTB宿泊白書	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1998-2001
T2	訪日外国人	地域の"とがった"に学ぶ インバウンド推進のツボ2	(財)日本交通公社	(公財)日本交通公社	2012
T2	訪日外国人	地域の"とがった"に学ぶ インバウンド推進のツボ	(財)日本交通公社	(公財)日本交通公社	2011
【T3】観光地・観光資源(I)					
T3	自然観光地	自然保護とサステイナブル・ツーリズム 実践的ガイドライン	小林英俊 (財)日本交通公社 監訳	平凡社	2005
T3	自然観光地	エコツーリズム さあ、はじめよう!	環境省・(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2004
T3	自然観光地	エコツーリズム教本 先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド	小林英俊 (財)日本交通公社 監訳	平凡社	2002
T3	温泉地	温泉地再生 地域の知恵が魅力を紡ぐ	久保田美穂子 (財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2008
T3	温泉地	日本の温泉地を元気にする「温泉まちづくりの課題と解決策」提言集	温泉まちづくり研究会 公益財団法人日本交通公社	温泉まちづくり 研究会	2011
T3	温泉地	温泉まちづくり 温泉まちづくり研究会ディスカッション記録	温泉まちづくり研究会 公益財団法人日本交通公社	温泉まちづくり 研究会	2011-
T3	都市	都市観光でまちづくり	都市観光でまちづくり編集委員会編	学芸出版社	2003
T3	農山漁村	魅せる農村景観 デザイン手法と観光活用へのヒント	佐藤誠監修・(財)日本交通公社編	ぎょうせい	2004
【T4】観光地・観光資源(II)					
T4	観光資源	美しき日本 旅の風光	(公財)日本交通公社 監修	(公財)日本交通公社	2014
T4	観光資源	美しき日本 いちどは訪れたい日本の観光資源	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1999
T4	世界遺産・産業遺産	産業観光への取り組み 基本的考え方と国内外主要事例の紹介	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2007
【T5】観光産業					
T5	旅行業	旅行産業論	立教大学観光学部旅行産業研究会 編著	(公財)日本交通公社	2016
T5	旅行業	THE PATH TO FREEDOM JAPANESE HELP FOR JEWISH REFUGEES	(財)日本交通公社 (伊藤明)	(財)日本交通公社	2002
T5	概論・総論	観光ビジネスの手引き 地域文化活性化の業務指針	(財)日本交通公社	東洋経済新報社	1986
T5	旅行業	旅行業界	皆川 慎吾 他編著	(財)日本交通公社	1978初版
T5	宿泊業	21世紀旅館経営の課題 10年後を生き残るために	(財)日本交通公社	21世紀の旅館ホテルを 考える研究会	2002
T5	ガイド業	魅力ある自然ガイドツアーづくりの手引き	国土交通省総合政策局監修	(財)日本交通公社	2005
T5	ガイド業	実践講座 インタープリテーション	国土交通省観光部監修	(財)日本交通公社	2002
T5	ガイド業	自然ガイドのためのおもしろヒントブック	国土交通省観光部監修	(財)日本交通公社	2002
【T6】観光計画・開発					
T6	観光地づくり	観光実践講座講義録	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2007-2013
T6	観光地づくり	観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント	西村幸夫 ((財)日本交通公社編集協力)	学芸出版社	2009
【T7】観光政策					
【T8】観光経営・経済					
T8	観光地経営	観光地経営の視点と実践	(公財)日本交通公社	丸善出版	2013
T8	観光経済	観光経済レポート	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	2003-2008
【T9】観光と社会・文化・環境					
T9	観光と地域社会	コミュニティ・ベースド・ツーリズム研究 世界の実践事例に学ぶ成功の鍵	小林英俊・緒川弘孝・ 山村高淑・石森秀三	(財)日本交通公社	2010
【その他】					
T0	原論・概論	観光学の基礎	溝尾良隆編著 日本観光研究学会監修	原書房	2009
【調査報告書】					
		観光産業の経済効果 ー小豆島における理論的実証的研究ー	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1966
		旅行の心理分析 ー第1次報告ー	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1968
		地中海クラブ	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1970
		観光地の評価手法	(財)日本交通公社	(財)日本交通公社	1971

当財団研究員が執筆に関わった研究書・実務書20冊

観光読本「第2版」 発行：東洋経済新報社 2004年
観光全般について基本的な事項を網羅した概論と、当財団研究員による分析・提言をまとめた書籍。初めて観光分野に従事している自治体の担当者や、旅行業界の方、観光を学ぶ学生などの入門書。

観光の現状と課題 1979年
改組15周年事業の一環として、当財団が実施してきた調査研究の蓄積を世に問うことを目的に、我が国における観光の現状と抱える課題についてまとめた冊。

余暇社会の旅 1974年
改組10周年事業の一環として非公刊で開催されたシンポジウムの内容を取録。鈴木忠義（当時当財団専門委員）をコーディネーターとして、磯崎新、茅陽、小松左京、富永健一、西丸震哉、米山俊直といった各界新進気鋭の論者が観光について論じた。

自然保護とサステイナブル・ツーリズム 2005年
IUCN（国際自然保護連合）の「Sustainable Tourism in Protected Areas」の翻訳書。国立公園などの自然保護地域におけるツーリズムと資源保全のあり方、利用と保全をめぐるサステイナビリティをどう実現させていくか、各国の先進事例に学び、具体的なガイドラインを示す。

エコツーリズム さあ、はじめよう！ 2004年
エコツーリズムとは何か、推進の手順と重要なポイントとなるルールとガイドラインとは、そして地域資源の保全と持続的利用を可能とする資源管理のあり方などをまとめた手引書。2003年に設置された「エコツーリズム推進会議」（議長：小池百合子環境大臣）での議論を環境省と当財団が編集。



エコツーリズム教本
先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド 2002年
スティーブ・トーン女史による「ECO TOURS IN A PRACTICAL GUIDE FOR RURAL COMMUNITIES」(1996)の翻訳書。オーストラリアやヨーロッパで実践されている実践例や研究成果を併用しながら、エコツーリズムの持ついろいろな側面を分かりやすく網羅的に解説。

温泉地再生 地域の知恵が魅力を紡ぐ
学芸出版社 2008年
温泉ブームの中にもありながら苦戦が続く温泉地が、どのようにすれば再び憧れの地になるのか、現場で活性化に取り組み人々の目線から探り、具体的な行動のためのヒントや知恵をまとめた冊。

都市観光でまちづくり 学芸出版社 2003年
「都市観光を創る会」での議論をまとめた、都市観光推進の入門書。都市観光成功の秘訣である「住んでよし、訪れてよしのまちづくり」に向けた取り組み事例も紹介。

魅せる農村景観 デザイン手法と観光活用へのヒント
ぎょうせい 2004年
農村景観を観光活用するための基本的な考え方を、全国の事例を紹介しながら分かりやすくまとめた手引書。

産業観光への取り組み
基本的考え方と国内外主要事例の紹介 2007年
全国の地域活性化と観光に関わる人々から注目されている「産業観光」への取り組みと、着地型旅行商品（地域の側でつくる旅行商品）について、産業観光先進地（国内20事例、海外3事例）を例に、多くの写真とともに分かりやすく体系的に解説。今後のあり方、取り組み方についても紹介した本。



旅行産業論 2016年
立教大学（株）JTB総合研究所、当財団を中心構成される「立教大学観光学部旅行産業研究会」その研究会が、立教大学の講義内容をベースとして旅行業の体系的な整理を行い、書籍化したもの。実務的内容にとどまらず、旅行業全体を学術的かつ俯瞰的視点から解説。

実践講座 インタープリテーション 楽しいツアーづくりのためのプログラム開発と伝えるテクニック 2002年
インタープリテーション（自然ガイド）実践者向けの参考書。楽しいツアーづくりのためのプログラム開発方法やメッセージを伝えるテクニックを豊富な事例とともに解説。ヒントブックは自然ガイドツアー・プログラムづくりのための素材集。

観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント
学芸出版社 2009年
東京大学西村研究室（西村幸夫教授）と財団法人日本交通公社が共同で執筆。まちづくりから見た観光、観光から見たまちづくりの双方の視点から、具体的な事例を踏まえて「観光まちづくり」とは何かを解説する。

観光地経営の視点と実践 丸善出版 2013年
調査研究機関化（改組）50周年事業の一環として刊行。これまで培ってきた知見を「観光地経営」という視点で整理し、観光地づくりの研究者あるいは実践者の方々のバイブルとなることを意図した冊。

コミュニティ・ベスト・ツーリズム事例研究 2010年
観光を真に地域にとつづらすものとしていくためには、さまざまな課題が存在している。地域コミュニティが主体的にどのように観光と関わっていくことができるか、という観点から、中国貴州省、ブータン王国、ニュージーランドの3つの国・地域による観光を対象に取り組んだ研究をまとめた一冊。



美しい日本 旅の風光 発行：JTBパブリッシング
当財団が長年取り組んできた「日本における観光資源の評価」をもとに監修した写真集。1999年発行の「美しい日本」いちは訪れた日本の観光資源」を抜本的に改訂。英語訳付。

観光産業の経済効果
小豆島における理論的実証的研究 1996年
小豆島をモデルに行った、産業観光の投資効果および消費効果に関する理論的・実証的研究の調査報告書。産業観光の経済効果に関するマクロ分析、ミクロ分析、そして実態分析の3部で構成。

旅行の心理分析 第1次報告 1967年
旅行心理に関する研究結果の中間報告。旅行の好き嫌い、旅行に出かける動機、観光地のイメージなどについて、若年層を対象に質問紙方式調査を行い、心理学的分析および推測統計学的検定処理の作業を行ったもの。

地中海クラブ 1970年
地中海クラブが1968年12月に刊行した、Club Mediterranean、を抄訳したもの。二日のうち、わずかな時間しか過ぎない宿泊施設は簡略にして、スポーツや文化活動を充実させ食事の質量ともに豊かにする」という方針が成功した、新しいパカンス形式を垣間見る。

観光地の評価手法 1971年
正しい保護、開発の促進を目的に、観光資源、観光地を評価する研究と手法を紹介し、世に問うた報告書。問題の所在、方法論、結果と考察、モデルの適用の4章で構成。



報告書

人と情報、地域をつなぐ図書館

— 図書館との連携で広がる観光まちづくりの可能性 —

4

公益財団法人日本交通公社 観光文化情報センター 企画室長・主任研究員

福永 香織

はじめに

ここ数年、「本」や「図書館」を取り巻く環境は大きく変わってきている。2012年（平成24年）に民間による指定管理者制度を導入した「武雄市図書館」はさまざまな議論を呼び話題となっているが、それ以前から、これまでの枠組みにとられないユニークな取り組みを行っている図書館が全国に存在している。その動きは雑誌の特集や書籍のみならず、キュレーションメディアなどでも取り上げられるほどである。一方で、地域の観光政策や観光地づくりの観点からは、連携先として図書館が挙がることはほとんどなかった。しかし、近年の図書館の取り組みは立ち寄り先としてだけでなく政

策面においても観光と親和性の高いものが多い。そこで、本特集では、図書館をとりまく近年の動きを概観しつつ、2つの事例を取りあげ、図書館との連携で広がる観光まちづくりの可能性を探ってみたい。

図書館と観光との連携に関する先行研究と議論

先行研究としてそれほど多くないが、松本^①が「観光と図書館の融合」において、図書館や観光を取り巻く環境の変化や特性を踏まえて、両者の親和性の高さを指摘し、図書館のサービスを①集客効果が強い項目（コレクション・文庫、イベント・行事、設計やデザインの効果、図書館への視察・見学、図書館とツ

アー）と②補助効果が強い項目（地域資料、地域テーマに沿った蔵書、レファレンスサービス、デジタルアーカイブスによる情報提供、情報発信の多様化）に分けて観光との融合について整理を行っている。

近年では2010年（平成22年）7月に草津温泉で図書館問題研究会の全国大会が開かれ、「まちづくり・観光・図書館」がテーマとして取り上げられた他、（公社）日本図書館協会が発行する「図書館雑誌」（2012年8月）の特集テーマに「観光ポータルとしての図書館」が据えられ、小布施町立図書館まちとしよテラソや奈良県立図書館情報館などの事例が紹介されている。また、当財団の機関誌「観光文化」2013号（2010年9月）におい

ても、視点「観光地における図書館の役割—観光客にも利用され、観光地の持続的発展に寄与する図書館とは—」において、草津町立図書館の事例を紹介しながら、住民のための図書館に加え、観光地の図書館の役割として「I住民と観光をつなぐための図書館」「II観光客のための図書館」「IIIリピーターや連泊客・長期滞在の来訪者のための図書館」という切り口で整理を行っている。

図書館を取り巻く課題と観光行政からのアプローチ

近年、図書館を取り巻く課題として挙げられているのが、活字離れやインターネットの普及などによる利用者像の変化や、予算の削減、評



「ツーリスト」第六年第五号 表紙
「旅の図書館」所蔵

旅行者のための図書館の必要性については、ジャパン・ツーリスト・ビューローの雑誌「ツーリスト」(第六年第五号)の「旅行と読書」において、東京帝国大学図書館長の和田萬吉が「旅客の為に図書館」と題し、詳細に言及している。ここではその一部を要約して紹介したい。

- ・遊覧地、鉄道、汽船、ホテルなどで小規模な図書館をもうけることは緊切であり、特に避暑地など旅行者が長期滞在する場所では、旅行者のみならずその地域の繁栄のためにも重要なことである。
- ・汽車、汽船は単に旅行者を送迎し、旅館は旅行者を宿泊させるだけでなく、その土地の有志と協力して小図書館の設置に着手すべきである。汽車や汽船内に図書スペースを設置している例はアメリカで多くみられる。アメリカは図書館業が最も発達している国である。
- ・図書館の管理・運営にあたっては片手間ではなく専任で従事する人を付けるべきである。
- ・蔵書の数としてはそれほど多くなくても良いが、きちんと選書したものを置くこと。備えるべき図書としては、その地域の歴史、地理、工芸、産業などの郷土資料が第一であり、次いで高尚な文学、美術書類などである。
- ・閲覧は無料にすべきである。貸出をする場合は一日は無料にして、それ以上の期間になる際は一定の料金を徴収することもよい。また、図書の汚染や破損に対しては相当の制裁を設けるべきである。

価値の確立(注2)などである。その一方で、これからの図書館の在り方検討協力者会議による「図書館の設置及び運営上の望ましい基準の見直しについて」(文部科学省2012年)では、これからの図書館サービスに求められる新たな視点として、地域の課題に対応した施策と結びつけた図書館サービスの実施や、課題解決支援機能の充実、他の図書館や関係機関との連携、紙媒体と電子媒体の組み合わせによるハイブリッド図書館の整備などが挙げられている。さらに、2014年(平成26年)には図書館の機能強化の参考にするためテーマ別に事例を取りまとめた「図書館実践事例集」(人・まち・社会を育む情報拠点を目指して)が同省より発行された。図書館のサービスの対象としては第一に地元住民であるという前提があるものの、その取り組みの範囲が観光やまちづくりに及ぶことはそれほど珍しいことではなくなっている。

実際、全国の188館を対象とした「観光と図書館に関するアンケート」(注3)によると、「図書館は観光や観光客と様々な関連がある」とい

う意見に対し、「ある程度納得できる」が69.0%、「大いに納得できない」が19.3%、「あまり納得できない」が10.3%となっている。その地域が観光政策に力点を置いているかどうかによっても異なると考えられるが、図書館自体の観光に対する意識もそれほど低くはないことが分かる。具体的に観光とも親和性の高い図書館の取り組みを分類してみると図1のようなになる。見る、訪れる対象としてはもちろん、図書館という建物を超えて地域全体で活動している例や、図書館ならではの知の蓄積

観光・まちづくりに関連する特徴	図書館の例
立ち寄り先としての図書館	・建築としての魅力 ・空間快適性 ・利便性
情報提供拠点としての図書館	・観光情報の提供 ・書籍などの出版 ・相互観光支援展示
学ぶ・出会う・体験する場としての図書館	・イベント・企画の実施 ・多様な主体との連携 ・産業・ビジネス支援
地域をつなぐ中核としての図書館	・本をツールとしたまちづくり ・地域全体での取り組み

図1 観光・まちづくりに関連する図書館の要素

をうまく活用している例が見受けられる。

一方で、観光行政の立場から図書館をどうとらえているかということについて全体像は見えていない。この点はさらなる調査が必要であるが、少なくともこれまで筆者が関わった地域の観光基本計画などにおいては、各施策の連携先として図書館の名前が挙がることはなく、観光パンフレットなどに図書館が掲載されている例もほとんどなかった。

以下では、図1で整理をした図書館の中から特に注目した伊那市立高遠町図書館と奈良県立図書館情報館の例を紹介する。

伊那市立高遠町図書館

— 本の町・高遠を支える

— コーディネーターとして—

伊那市立高遠町図書館は1986年（昭和61年）に高遠町文化センターと一体となってオープンした（写真1）（注4）。伊那市のもう一つの公共図書館である伊那市立伊那図書館とともに、従来の図書館の枠を超



写真1 伊那市立高遠町図書館

えたユニークな取り組みを行っている。同図書館の諸田和幸氏に話を伺った。

高遠町は進徳館という藩校の存在や、古文書などの資料が多く現存していること、郷土史家が多いといった地域特性などもあり、以前から「本の町」として本を核としたまちづくりが行われている。その一つが今年で8年目を迎える「高遠ブックフェスティバル」(注5)である。期間中は街中の各所にブックスポットが設けられている他、古本市、高遠出身の作家にまつわるトークショー、本の読み聞かせなどのイベントが開



図2 2016年高遠ブックフェスティバル フライヤー

催される(図2)。既に地域で実施されている取り組みに加え、地元住民がやりたいことにチャレンジできる場として、内容や期間を変えながら毎年さまざまな試みが行われている。運営は市民や市外の有志などからなる実行委員会が中心となっており、その事務局を高遠町図書館が務めている。

2010年（平成22年）に始まった「高遠ぶらり」プロジェクト（高遠ぶらり制作委員会、高遠町図書館事務局）は、「伊那谷の屋根のない博物館の情報基盤の構築と実感ある知



図3 「高遠ぶらり」(アプリ) ©共同出版ART Creative

の獲得を楽しむ場づくり」を目指し、デジタル古地図「高遠ぶらり」(アプリ)(図3)の開発や関連グッズの開発・販売などを行っている。内部記録としての資料のデジタル化が目的ではなく、デジタルアーカイブ、デジタルコモンズ構築を念頭に置いている。住民はもとより興味を持った市外の関係者も一体となり活動しており、これまでに「高遠ぶらり」プロジェクトに参加した人数は600人ほどにも上る。「このまちってこんなに面白かったんだ」という声がかねがね聞かれるようになった他、当初の狙

いでもあった郷土資料の利用・理解促進につながったという。

アプリのメニューには「高遠ぶらり」「伊那谷ぶらり」「ジオパーク・エコパークぶらり」「内藤新宿ぶらり」の4つがあり、例えば高遠ぶらりの中には、高遠城下町絵図や町割図など13のマップ(注6)が掲載されている。マップの中の各スポットには現在の写真や関連資料、解説文がひもづけられており、それらは同プロジェクトに参加した住民や地元の高校生が、実際にまちあるきを行った上で作成したものである。GPSと連動していることに加え、観光マップも入っているため、土地勘がない観光客も使いやすい。さらには、「高遠ぶらり」を活用したウォークラリー「高遠ぶらり」「伊那まちぶらり」も開催している。公開から5年で36カ国、6万件的ダウンロードがあった。アプリを使った観光客からも好評で、口コミでその良さが伝わっている。

また、2015年(平成27年)からは「高遠ぶらり」のスピンアウトプログラムとして、参加者自身が既存資料やまちあるきから学んだ地元

の情報を Wikipedia に掲載・発信していく「Wikipedia Town」の取り組みも開始している。

諸田氏は、「情報は食べることと同じくらい重要であり、情報を誰もが見える、知る、楽しめる状態にすること、それをコーディネートするのが図書館の役割である」と語る。一般的に古文書の勉強会やまちあるきは自分たちで学び満足して終わることも多いが、高遠町では住民自身が発信者となり、得た情報を多くの人が楽しめるツールに作り上げている。さらに特筆すべきことは、取り組みの枠組みや範囲を既存の行政圏ではなく、伊那谷という大きな文化圏で捉えていることである。行政圏に縛られずに地域内外の多様な立場の人や組織が参画しているため、高遠町での取り組みが周辺市町村に派生している点も興味深い(注7)。

奈良県立図書館情報館

— 情報を再編集し、
ニーズを創り出す —

奈良県立図書館情報館は奈良駅よ



写真2 奈良県立図書館情報館

真2)。決してアクセスが良いと言える立地ではないが、平日の昼間にもかかわらず館内は多くの人で賑わっている。構想に10年をかけて2005年(平成17年)に開館した同館は、ほぼ毎日のようにイベントが開催されることでも知られており、カレンダーに開催されたイベントだけでなく、館内では医療、健康や法律関係などのコーナーや、いろいろなテーマを切り口にした図書展示なども随所で行われている。

「ニーズに応える図書館ではなく、ニーズを創り出す図書館にしたい」と話すのは同館総務企画課の乾聰一郎氏。これまで図書館に興味を持たなかった人にかに立ち寄ってもらえるかを意識している。コンサート、図書館を舞台とした演劇、寄席、マルシェ、ファッションショーなど、図書館で開催されるとは思えない内容に多くの来館者が集まる。もちろん、図書館の資料を利用してもらうため、イベントの開催時には当日配布するプログラムなどに必ず関連図書などのリストを付けている。



図4 ホテル日航奈良貸出文庫「都読」

2009年(平成21年)から2011年(平成23年)には「自分の仕事を考える3日間」として、仕

事や働き方をテーマにゲストの話をうかがいながら参加者同士が話し合える3日連続のフォーラムを開催し(注8)、全国から一日約3500人の参加者が集まった。期間中はホテル日航奈良との連携による宿泊プランも販売し、図書館やホテル周辺の飲食店は多くの若者で賑わったという。また、千田稔館長の著作をはじめ、館所蔵の書籍からその時々の奈良のトピックの関連図書を選びリスト化し、その図書を宿泊客に貸し出すサービスも行っている(図4)。

さらには、文化発信のメディアというコンセプトを掲げている通り、館内のみならず、図書館外での出張講座や、奈良県内で開催される正倉院展や古事記編纂1300年、聖徳太子没後1400年などのイベントとの連携など、奈良県の文化振興にも寄与している。その他、文学、映画、物語の切り口で奈良を紹介している『読み歩き奈良の本』の編集(奈良県立図書館創立100周年記念)や、地元企業との協働で作成している情報誌『ナラヨム』の発行などを行っている。公立図書館として初めて開催したビブリオバトルは70回

を超え、これまで参加した県内外の有志が企画・運営を行っている。

乾氏は、これからの図書館にとって大事なことは「情報の再編集」であると語る。イベントなどもその一環であり、図書館に蓄積される情報を独自の切り口で発信し、利用者にとって新たな魅力や面白さに気付いてもらうことを狙いとしている。これだけ多くのイベントや展示の企画には、館内の司書の協力はもちろんのこと、館外の多様な主体との連携が必要不可欠である。とにかく自らいろいろな人に会いに行き、つながりをつくっているという。

図書館のストックII地域の宝をどう活かすか

今回の調査を通じて、図書館の活動範囲の広さと地域性の豊かさ、バリエーションに衝撃を受けた。しかし、予算や人材が減らされている中で、高い理想を掲げ、司書の仕事の範囲を広げていくのは簡単なことではない。高遠や奈良の例のように、司書のみならず地域内外の多様な主体と一体になって取り組みを進める

こと、自分たちで取り組んだことがかたちになり、やりがいを肌で感じられるしくみがあることは重要なポイントである。

一方で、図書館としての取り組みを発信し、広めていく上では、地域内外に魅力を発信することが多い観光行政や観光関連団体との連携は効果的である。ヒアリングを通して共通だったのは、両図書館ともあって観光を意識しているわけではない、取り組んでいることがたまたま観光と親和性の高いものであったという点である。観光のみならず、多様なテーマを扱う図書館のストック(人・情報・資料)をいかに引き出せるかは周囲からのアプローチにもかかっている。観光という観点からの図書館の活用と連携については、さらなる研究が必要であるが、いま一度、それぞれの立場から地元の図書館の特徴や取り組みに目を向けてみてはどうだろうか。そして、「旅の図書館」としても全国の観光地や図書館と連携して取り組めることを模索していきたい。

(ふくなが かおり)

(注1) C.A.T.S.叢書第5号「観光と図書館の融合」松本秀人、北海道大学観光学高等研究センター、2010年。「観光実務ハンドブック」(日本観光協会編、2008、p.602)にある「観光施設が提供する役割には、目的役割と補助的役割がある」との説明を応用。

(注2) 松本氏は観光に関連した取り組みを行っている先進事例として鳥取県立図書館、高知県立図書館、草津町立図書館、奈良県立図書館情報館、千代田区立千代田図書館、津山市立図書館などを取り上げているが、観光学の観点からの分析が必要であると指摘している。

(注3) 入館者数や本の貸し出し件数のみならず、多様な取り組みをどのように評価するかが議論されている。第三者の間が評価する動きもあり、例えば、NPO法人 知的資源イニシアティブ(IRI)は、これからの図書館のあり方を示唆するような先進的な活動を行っている機関に対して「Library of the Year」を授与している。

(注4) 「観光と図書館の融合」p.109、p.121

(注5) 2006年に高遠町、伊那市長谷村が合併し、伊那市立高遠町図書館に改称

(注6) 2009年から開催。イギリスのヘイオンワイのように、日本にも「本の町」があればという北尾トロ氏、斉木博司氏の想いから始まった。

(注7) 2016年9月現在。定期的に更新を行っている。

(注8) 諏訪市でも老舗の酒蔵を会場に20店以上の書店やコーヒーショップが本店する「くらもと古本市 酒蔵の街の読み歩き」が開催されている。

2011年まで毎年開催され、各回の概要をまとめた本も出版されている(西村佳哲著 with 奈良県立図書館情報館 弘文堂刊)。また、2015年には同フォーラムの番外編として「ひとの居場所をつくるひと」フォーラムを開催(同フォーラムの本も弘文堂より出版予定)。

旅心を誘う、 旅の本のレジェンド30選

旅行作家

荒木 左地男

5

一冊の本を片手に旅に出る。

そんな旅を夢想するひとは多いに
違いない。いまに始まったことでは
なく、『土佐日記』や『おくのほそ道』
の時代からインターネットが普及し
た現代まで、見知らぬ土地に旅した
ひとの旅の記録は、人びとの好奇心
を刺激し、旅への思いを掻き立てて
きた。少年時代から旅が好きだった
私も、たくさんの旅の本を読んで、
旅に憧れてきたひとりだ。

そして、それらの本を時系列を追
って思い返してみると、それらはバ
ラバラに存在していたのではなく、
時代の流れを反映し、あるいは時代
をリードする新しい旅のカタチを作

り出していることに気付く。旅の形
は時代と共に変遷し、旅の本はその
映し鏡であり、時代の旅に影響を与
えてきた存在でもあった。

本稿では、戦後から現代まで6つ
の時代に分けて、それぞれの時代に
登場した30冊の本を時代背景と共
に紹介していく。取材から10年以上
も経ってから出版された本もあり、
必ずしも年代ごとの傾向と本の背景
がびたりと合致するわけでもない。
また旅の傾向が時代の節目で線を引
くようにくっきりと変わるわけでも
ない。しかし、改めて旅の名著を年
表（P46）上に並べてみると、時代
変化と話題を呼んだ旅の本との見事

な相関関係を見出すことができる。
旅の名著は1冊1冊が奥深く、旅心
を誘ってくれるものだが、時代の変
遷というもう一つの視点を加えるこ
とで、旅の本が一層興味深く見えて
くるのではないだろうか。
※発行年度はいずれも日本国内での
初版年。

●'50年代

戦後旅行記の夜明け。
封印されてきた旅への関心が、
徐々に膨らむ。

本稿が取り上げるのは、1950
年代も後半あたりからの書物となる。

戦前から戦中に掛けても、素晴
らしい旅の本は何冊もあった。海外
旅行が困難な時代でも『西藏旅行
記』河口慧海、『マレー蘭印紀行』
金子光晴など優れた旅の本が登場し、
国内で旅行の大衆化が進んだのは、
意外にもこの頃だった。

しかし、敗戦と同時に日本は一気
に旅を封印する。1964年の海外
渡航自由化までの20年近くの間、外
貨とパスポートを手にすることが許
された特権的な人たちの旅行記や海
外の作家の本をあこがれのまなざし
で読み漁るしかなかった。

『インドで考えたこと』

堀田善衛 岩波書店 1957



日本人の出国が厳しく制限され
ていた終戦直後、作家が海外の旅を
書いた本としてはほぼ第1号と言っ
ていい。宮崎駿が最も尊敬する人物

として上げている作家で、終戦直後の世界観をジブリ作品の底流に探してみるのが一興だ。60年も前に、欧米中心主義とは異なる視点でアジアを観察しており、当時としては画期的な作品と言える。

『どくとるマンボウ航海記』

北杜夫 中央公論社 1960
(写真は新潮社 1965)



堀田善衛はアジア作家会議出席のため、そして北杜夫は船医として海洋調査船に乗り込み東南アジアからヨーロッパまでまわる。どちらも、公的な理由がなければ海外に出かけられない時代の作品だ。それにもかかわらず、北杜夫の文章は軽妙洒脱。父は歌人の斎藤茂吉、母は南極まで出かけたスーパーおばあちゃん、斎藤輝子、そして兄は日本旅行作家協会会長も務めた斎藤茂太。筋金入りの旅行家一族なのだ。

『オン・ザ・ロード』

ジャック・ケルアック
河出書房新社 1959

旅行者のバイブルと言っている作品が、本国の出版のわずか2年後に日本で初翻訳された。ビートニクと呼ばれる厭世的な若者たちの旅が日本の若者の心にも響いた。福田実訳で『路上』のタイトルで出版されたが、半世紀後(2007)に青山南訳で『オン・ザ・ロード』のタイトルとなった。旅は時代を超えて自由の象徴であることがわかる。

●'60年代

海外渡航自由化で海外旅行の夢膨らむ。

旅の先駆者が描く先進国の旅行記に憧憬のまなざし。

東京オリンピックの開催に合わせて1964年、いよいよ海外渡航が自由化された。その2年前にベストセラーとなった堀江謙一の『太平洋ひとりぼっち』(1962)は、解禁が待ちきれずパスポートなしでの違法渡航を決断する緊張感が生々しい。

60年代には、そんな海外渡航解禁

禁という大きな節目を挟んで、日本人の旅行観が大きく変わる前後の、日本人の旅への初々しいまなざしが感じられる本が次々と登場した。

『忘れられた日本人』

宮本常一 未来社 1960
(写真は岩波書店 1984)



宮本は民俗学者という肩書きだけではくることができない。本書でも人間力とでもいう懐の深い洞察と慈しみの心が、行間から伝わってくる。丹念に歩き、丹念に土地の人の話を聞く。この「丹念」という姿勢こそ、現代の旅行者に欠落しているものかもしれない。海外渡航解禁前後に、日本人を見つめ直すこの本が世に出た意味は大きい。

『何でも見てやろう』

河出書房新社／講談社 1961
「ひとつ、アメリカへ行つてやろ



う、と私は思った」という有名な書き出しに騙されてはいけない。ふらっと気ままにアメリカに行ったわけではなく、難関のフルブライト留学生として渡航したエリート。ところが、帰り道がすごかった。オスロからの片道切符だけを持ち、1日1ドルの極貧予算で中近東から東南アジアを経由しながらの壮絶でしかも滑稽な旅。この本を握りしめて同ジレットを辿った旅人がその後続出した。

『ヨーロッパ1日5ドルの旅』

アーサー・フロンマー
日本評論新社 1963
フロンマー夫妻が実際に歩いて探した宿やレストラン、交通手段などを具体的に紹介した旅の実用書。いまなら当たり前のガイドブックの手法だが、当時は珍しく、この流れは

日本の『地球の歩き方』などにも継承されている。

『青年は荒野をめざす』 五木寛之

文藝春秋 1967

当時の学生たちの外国へのあこがれを、ここまでぎつしりと詰め込んだ本は他にない。いま読み返すと荒唐無稽とさえ思えてしまう都合のいい出会いや、あり得ない展開が次々と続く。海外に飛び出せばこんなすごい人生が待っているのか。多くの若者の背中を押しした一冊。

●70年代

旅が一般大衆にまで拡大した時代。個人旅行の環境が整備され、ひとり旅目線の旅行記が多数登場

ジャンボジェットの登場やドルの変動相場制導入などで、日本人の海外旅行の一般化が進んだ時代。国内でも大阪万博の開催が個人旅行を活性化し、ディスカバー・ジャパンがそのブームを後押しし、鉄道旅ブームが到来する。79年には『地球の歩き方』が創刊され、バックパックス・タイトルの旅が若者を魅了。80年代へ

と繋がる旅の本の個性化のはじまりとなった。

『印度放浪』 藤原新也

朝日新聞出版 1972

この本は、いくつかの本との対比で読むとおもしろい。ケルアックの『路上(オン・ザ・ロード)』1959は第二次大戦後のアメリカ青年の苦悩が背景だが、『印度放浪』は安保闘争、学生運動に疲弊した厭世的空気が背景だ。同じインド物の『河童が覗いたインド』妹尾河童1985、『深夜特急3(インド・ネパール)』沢木耕太郎1994との対比もおもしろい。インドは時代を超えて、一筋縄ではいかない旅先だと言ったことがわかる。

『河童が覗いたヨーロッパ』

妹尾河童 新潮社 1976

「覗いた」シリーズの第1弾。1年掛けて22カ国を歩き、詳細なスケッチを描いた。圧巻は泊まったホテル115の部屋のスケッチ。いまならスマホでパチリと撮れば済むことだが、相当な時間を掛けてすべて書きで記録。各パートの細かい説明

も手書きで入り、写真では伝えきれない温かみや発見が楽しめる。旅の大衆化で旅人の目線が生活者レベルまで下がってきたことの好例の本だ。

『悲しき熱帯』 レヴィ・ストロース

中央公論新社 1977



1930年代のブラジル奥地の少数部族を訪ねた旅の記録。旅行記というよりは文化人類学のレポートだが、高見からの観察ではなく、原住民へのリスベクトの視線での観察で、冒頭の有名なフレーズ「私は旅や冒険家が嫌いだ」にもそれが表れている。

欧米中心主義的視点からではない文明論として読み応えのある一冊だ。訳者の川田順三が書いた『悲しき熱帯』の記憶―レヴィ・ストロースから50年―2010を併せて読むと当時の世界観と筆者の視点により理解出来る。

『時刻表2万キロ』 宮脇俊三

河出書房新社 1978

70年代の鉄道ブームを象徴する本。最後の章に、宮脇さんの思いが籠もっていて読み応えがある。2万キロ完乗を達成した直後に、気仙沼線の新線が開通したのだ。廃線になる路線が多い中、こんなめでたいことはない。いそいそと乗りに出かけた宮脇さんの嬉しげな様子が胸に響く。鉄道の旅は宮脇さんにとって線を繋ぐ旅だったが、新幹線や飛行機で線が分断され、乗り物は目的地に着く手段になってしまった。乗り物そのものが旅だった時代。いまはそんな楽しみもなくなってしまったのかもしれない。

『パリ・旅の雑学ノート』

玉村豊男

新潮社 1979

旅のエッセイはガイドブックとしては役に立たないものだが、この本は違う。エッフェル塔もルーブル美術館も出てこないけれど、これ一冊で1週間くらいのパリ滞在は充分楽しめる。もつともカフェと舗道とメトロだけにやたら詳しい旅人になっ

てしまうのだが。40年近く前の本だが、特にカフェについては今もほとんど変わっていないことに気付く(値段を除く)。これもパリの魅力のひとつだ。俯瞰的に海外の街を見るのではなく、路地裏のにぎわいや生活者の匂いまで目を配るほど、旅の視点が低くなった時代であることを感じさせる。

●'80年代

若者主役の旅の大衆化、多様化が一層進む。
等身大の旅の視点で捉えた身近な旅の名著が多数登場

日本が一番勢いを持っていたのが80年代だったのかもしれない。85年のプラザ合意で円高が一気に進行し、海外渡航者は85年の500万人から90年には1000万人へと膨れ上がった。アメリカのビザが免除となったこともあってアメリカ西海岸プーランドの開園(1983)や瀬戸大橋の開通(1988)で、国内外とも旅行の大衆化、旅行スタイルの多様化が進み、これまでにない肩肘張

らない文調で書き進める、若くて才能ある旅の書き手が多数登場した。

『わしらは怪しい探検隊』

椎名誠 角川書店 1980

探検隊は男の子の夢である。オトナになっても少年の夢はなかなか消えてくれない。椎名誠隊長率いる「東日本何でもケトばす会」(略称東ケト会)の面々が離島でテントを張りサバイバルキャンプを始める。といつても、過酷な自然体験でもなんでもなく、いいオトナが徒党を組んで大騒ぎをするだけ。なのになぜか面白く、このシリーズは現在も続いている。アウトドアブームの先導役とも、脱力系旅行記の先駆者とも言われる。

『ゴーゴー・インド』

蔵前仁一 凱風社 1986

バックパッカーなら知らぬ人はいない伝説の雑誌「旅行人」の編集長蔵前仁一さんの書籍第1号。「旅なんてシチメンダクサイことは大キライだった僕に、その素晴らしさを教えてくれたのはインドであった」というフレーズにはビックリ! だっ

てその後「いつまでも旅で眠り続けたい」と言うほど旅にはまったひと。それほどインドのチカラはとてつもないということか。

『深夜特急』

沢木耕太郎 新潮社 1986



表紙のデザインからして旅に憧れる者の心をわしづかみにする。フランスを走る国際寝台列車北急行のポスターである。列車旅の話ではないが、闇の中を疾走する深夜特急のように、青春を駆け抜けるみずみずしい旅体験が多くの若者を熱狂させた。文庫を含めて600万部。テレビドラマにもなるという旅の本は、後にも先にもこれ以外にない。何度読み返しても、なぜか心震える。これほど時代を掴んだ旅の本は、他にない。

『アラスカ光と風』

星野道夫 六興出版 1986
(写真は福音館書店 1995)



日本人の探検家というイメージを変えたのは星野道夫であり、デビュー作のこの本だった。過酷な自然の中に身を置きながら、テントの中で先輩探検家の本を読み、何事もないかのように熊と対峙したことを淡々と書く。そんな人柄がにじみ出てくる探検家に日本人は初めて出会った。後に続くネイチャー作家や写真家に大きな影響を与えた、ひとつの時代のページをめくった旅人と言える。

『幻の怪獣ムベンベを追え』

早稲田大学探検部(高野秀行) 集英社 1989

この本は高野秀行ワールドへの入口。誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それを面白

おかしく書く、という姿勢を貫き通して、その後『アヘン王国潜入記』『ミヤンマーの柳生一族』『謎の独立国家ソマリランド』などの辺境・異境シリーズを続々と著す。旅の本の亜種・傍流とも捉えられがちだが、この流れが、その後の脱力系お笑い旅エッセイストの系譜へと続いていく。

●90年代

旅のスタイルの多様化とともに、旅人の精神的内面や、気負わない旅を切り口とした本へと拡大

80年代後半からのバブル景気は、90年代に入って一気にはじけた。ソ連崩壊、湾岸戦争などの政情不安も加わったが、人びとの旅行熱が冷めるのは21世紀に入ってから。パッケージツアーと自由旅行の間であるスケルトンツアー（航空券とホテルだけをセレクトした格安ツアー）も登場。人気テレビ番組から生まれた『猿岩石日記』猿岩石1996が250万部を記録したほか、旅人の精神的内面をテーマにした本や、気負わない脱力系の旅の記録も多く出版され、旅のスタイルの多様化とともに旅の本も多様化し、

新しい読者層への広がりが見えた。

『パタゴニア』

ブルース・チャトウイン
めぐるくまーる 1990

時代の動きに連動しているかどうかを超えた世界の紀行文学として、この本をはずすことはできないだろう。読みやすい紀行文を本書に期待すると当てが外れる。土地から土地へ、人から人へ、エピソードからエピソードへ。即興詩のような展開に翻弄されまくる。チャトウインは旅に芭蕉の『奥の細道』を持ち歩いたというのも日本人にとっては興味深い。

『アルケミスト』

パウロ・コエーリョ
角川書店 1994

旅が舞台の本ではあるが、いわゆる旅の本ではない。世界中でベストセラーになった理由は、おそらく旅の中に様々な人生の示唆が含まれるというメッセージが、やや自己啓発的に描かれているからだろう。旅に『星の王子さま』『サン・テグジュペリ1953』を持つていくという人は多い。この本も旅先で読むとさらに

共鳴出来るのではないか。『パタゴニア』と共に、90年代の旅の深まりが、この2冊の読者を増やすきっかけとなり、その後も読み継がれた名著として育ったという時代背景は押さえておくべきだろう。

『アジアン・ジャパニーズ』

小林紀晴
情報センター出版局 1995

日本に居心地の悪さを感じて旅に出る若者たちの群像は『日本を降りる若者たち』下川裕治2007（後述）でも紹介されるが、この本より10年以上前に、敷かれたレールに乗ってただ生きるだけの暮らしに違和感を覚えて、逃れるようにアジアに旅する人たちを丹念に追いかけた本を小林は著した。かつてアジアを旅した屈強な旅人のイメージとは異なるナイーブな若い旅人像は、日本人が旅に求めるものの変化を象徴している。

『もの食う人びと』

辺見庸 共同通信社 1994
（写真は角川書店 1997）

91年に芥川賞を取った著者の『自



角川文庫

動起床装置』1991も強烈だったが、この本はさらに衝撃的だった。残飯食いから人食いまで、飽食の日本をひとたび出れば、もの食うことは生きることと直結していることを、ぐさりと指摘する。食に強軟でないものは、生きることにも強軟さを欠く。グルメに興じている日本人ははつとさせられる。90年代に起こったバブル崩壊が、筆者や読者の目を飽食と飢餓に向けさせたことは想像に難くない。
平成6年度JTB紀行文学大賞受賞作。

『ハワイ紀行』

池澤夏樹 新潮社 1996

『ハワイ』が観光客におなじみのリゾート地なら、『ハワイイ』は世界の近代化の波に荒らされる前の、



大國アメリカに征服される前のハワイの残滓を表す言葉なのかも知れない。月並みなハワイ旅行から脱する本書の旅へのまなざしは、成熟しつつある日本人の旅行観の象徴とも言える。歴史に根付いた不動のものを見直すという時代の価値観を池澤が見事に捉えた作品だ。

●2000年代

若者旅の減少とシニア旅の拡大を背景に

旅の本のテーマの細分化が進行

同時多発テロ、SARS、イラク戦争……。海外旅行への危機意識の高まりは、不況と重なって旅への志向にブレーキを掛けた。旅に出る若者が減る一方で、定年を迎えた団塊世代のシルバー旅行が伸び、旅の二

極分化が始まった。旅の本もエコロジー系、体験型、カルチャー志向などテーマの細分化が進む。女性が書く何冊かの旅の本も話題を集めた。

『ガンジス河でバタフライ』

たかのてるこ
幻冬舎 2000



藤原新也が『印度放浪』で衝撃的に描写したガンジス河の火葬から30年。黒こげの死体が流れていたその河で、21世紀には、女の子がバタフライを泳いでしまうのだ。心配性の女性の初めての旅が香港からインド。根がタフだからできたわけではない、でもトラブルを笑い飛ばす快活さが彼女の身上。同時代の多くの女性が彼女の生き方に共鳴した。この頃には、作者との価値観の共有は、旅の本の大きなテーマとなった。

『旅行者の朝食』

米原万里 文藝春秋 2002



同時通訳者にはなぜか名エッセイストが多い。異なる文化の橋渡しの仕事だからかも知れない。本質は細部に宿る。細かいちよつとしたズレや違いが、笑いと共にものの本質を伝えてくれる。本書にはロシアの食にまつわる抱腹絶倒の小話が山ほど詰められている。間違っても旅先で食べる朝食の本ではないので、そのつもりで。そんな話も少しはあるけれど。

『日本を降りる若者たち』

下川裕治

講談社 2007

80〜90年代、アジアの街に長期滞在する「沈没」組は、いつかは日本に帰る「旅行者」だった。下川が本書で紹介する21世紀の「外こもり」

は、日本社会に希望をなくし、国内での内こもりにも疲れ果て、日本を棄てた若者たち。すでに旅行者ではないのだが、若者の旅離れとシームレスに繋がっている気がする。いまから10年前の取材だが、状況はいまもさほど変わらない。

『インパラの朝』

中村安希
集英社 2009

誰だったか、旅行記というのはどこで何をしたかではなく、どんな文章で表現しているかが重要だと言った。本書で開高健ノンフィクション賞を受賞した中村の文章は、時にタシカを切るように、時に妙に冷静に、時に分析的にと、切れ味のいい文章で彼女の内面そのままの運びを見せる。そのオンナっぷりがいい。若者(とくに男性)が旅をしなくなりはじめた頃、女性の旅人は屈強な精神を持っていた。

●2010年代

ネットに押されて、旅行書籍への関心の低下、分散化が進む。時代の旅の語り部が登場するのはいつ？

インターネット、スマホの普及、テレビ多チャンネル化による旅番組の増加などで、出かけなくても誰でも簡単に異文化を知ることができる時代。それは同時に旅行作家が育ちにくく、優れた作品が生まれにくい時代でもある。絶景ブーム・世界遺産ブームなどで旅のビジュアル本は元気だが、相対的にじっくり書き込んだ読み込む旅行記・紀行書は不調。だからこそ求められるのが、生き方やライフスタイルなど、新しい旅の切り口だ。

『世界しあわせ紀行』

エリック・ワイナー
早川書房 2012



旅で幸せ探しをする人はきつと多いだろう。では幸せとはいったいなにか？ ニューヨーク・タイムズの

記者だった著者は10カ国を訪ね歩いた。分厚いページにユーモアたっぷりに書かれた各国の人たちの幸せ談義が満載。国ごとの幸せ感覚の違いが出ていて興味深い。本書はテーマを持って旅する本の好例でもある。

『TRUE PORTLAND』

BRIDGE LAB メディアサーフ
コミュニケーションズ 2014

大手チェーン店より、地元のローカル店を大事にする街。そう聞くだけで、この街の魅力がわかる。全米で住みたい町No.1に選ばれた街ポートランドのガイドブックが本書だ。といっても旅のガイドではなく、クリエイティブなひとがこの街の暮らしをどう楽しむかというガイド。そんな本が書店の旅行本コーナーで売れに売れた。旅に求めるものがこんなにも変化してきていることの証左でもある。エコロジー、オーガニックといった新しい価値観に旅も寄り添っていく。

『The Songlines ソングライン』

竹沢うるま 小学館 2015
1021日、103カ国を巡る旅



荒木左地男 (あらきさちお)
旅行作家・旅行ジャーナリスト
1973年東京教育大学(現・筑波大学)卒業。在学中から放送作家としてテレビ・ラジオの海外情報番組を担当。海外ブランドの広告マーケティング、博覧会パビリオンの企画プロデュース等を手掛けると同時に、旅行作家として世界70カ国を旅し、著書8冊の他新聞雑誌への執筆、講演イベント出演多数。現在、代官山鳥屋書店旅行コンシェルジュ、(一財)日本ユースホテル協会理事を兼務。

の記録。処女作にして352ページ。このボリウムは旅の重さでもある。『深夜特急』から30年。久々にズシリとくる旅の書き手の登場を感じた。多くの優れた写真集を出し新進写真家として注目されている彼だが、作家としての2作目にも期待したい。

駆け足で時代ごとの旅の変化と、その時々を読まれた旅の本を俯瞰してきた。

紙数の都合で取り上げたくても割愛せざるを得ない本もたくさんあったが、その一方で、一世を風靡し

た『深夜特急』のような旅の本の巨人が、その後登場しないまま30年近く経っていることにも気付かされる。旅行の普及・大衆化やネットの発達の中で、まさに「レジェンド(伝説・偉人)」と呼ぶにふさわしい旅の本はもう登場しないのか。あるいは必要とされていないのか。

力のある新しい旅の書き手が再び登場して、21世紀にふさわしい旅の姿を見せてくれ、旅心を掻き立ててくれることを期待したい。

(あらきさちお)

図 旅の本 年表

<p>50年代 戦後旅行記の夜明け</p> <p>旅のフロンティア時代 限られた人だけが行けた 海外旅行の記録</p> <p>敗戦後、 旅の鎖国状態。 海外情報に 飢えた人びと</p>	<p>1945 終戦 1957 『インドで考えたこと』 堀田善衛 1959 「兼高かおる世界の旅」 放送開始 『どくとるマンボウ航海記』 北杜夫 『オン・ザ・ロード』 ジャック・ケルアック</p>
<p>60年代 海外旅行の夢膨らむ</p> <p>海外渡航解禁。 アメリカ、ヨーロッパなど あこがれの先進国への まなざし</p> <p>何でも知りたい若者が 少ないドルを持って 旅に出る。</p>	<p>1960 『忘れられた日本人』 宮本常一 1961 「トリスを飲んでハワイに行こう」 キャンペーン 『何でも見てやろう』 小田実 1962 堀江青年ヨットで太平洋横断 1963 『ヨーロッパ1日5ドルの旅』 アーサー・フロンマー 1964 海外旅行解禁 持ち出し外貨ひとり年1回 500\$ 東京オリンピック ジャルパック誕生 1967 『青年は荒野をめざす』 五木寛之 1969 東名高速道路全通 アポロ11号月面着陸</p>
<p>70年代 旅の大衆化</p> <p>インド・アジア への視線 近いけれど 知らなかった 風土と人びと</p> <p>東海道・山陽 新幹線開通で ローカル鉄道旅 見直される</p>	<p>1970 大阪万博 ジャンボジェット登場 ディスカバー・ジャパンスター 1971 ニクソン・ショック ドル変動相場制に 1972 海外渡航者100万人突破 『印度放浪』 藤原新也 1975 ベトナム戦争終結 1976 『ポバイ』創刊 アメリカ西海岸ブームの火付け役 『河童が覗いたヨーロッパ』 妹尾河童 1978 成田空港開港 『悲しき熱帯』 レヴィ＝ストロース 1978 『時刻表2万キロ』 宮脇俊三 1979 『パリ・旅の雑学ノート』 玉村豊男</p>
<p>80年代 若者が主役の旅時代</p> <p>若者の冒険旅 ひとびとの 暮らしを見る ミクロな旅</p> <p>格安航空券が 下支えした バックパッカーブーム</p>	<p>1980 『わしらは怪しい探検隊』 椎名誠 1983 東京ディズニーランド開園 1985 プラザ合意 円高進行 1986 パブル景気はじまる 『ゴージャス・インド』 蔵前仁一 『深夜特急』 沢木耕太郎 『アラスカ光と風』 星野道夫 1988 アメリカ ビザ免除 瀬戸大橋開通 青函トンネル開通 1989 『幻の怪獣ムベンベを追え』 早稲田大学探検部 (高野秀行)</p>
<p>90年代 旅スタイルの多様化</p> <p>旅のスタイルの 多様化</p> <p>気負わない 脱力系の旅</p> <p>内面を 見つめる旅</p>	<p>1990 湾岸戦争 『バタゴニア』 ブルース・チャトウィン 1991 ソ連崩壊 1994 1ドル100円割れ 『アルケミスト』 パウロ・コエーリョ 1995 海外渡航者1,500万人に 1ドルが79円に 『アジア・ジャパニーズ』 小林紀晴 『もの食う人びと』 辺見庸 1996 猿岩石ブーム 星野道夫ヒグマ襲撃事件 『ハワイ紀行』 池澤夏樹 1999 EC統一</p>
<p>2000年代 若者旅の変化</p> <p>女性の視点 ひとが行かない場所へ ひとがしない 旅のかたち</p> <p>新しい ライフスタイルを 求めて</p> <p>ナチュラル志向 人生の幸せ追求</p>	<p>2000 『ガンジス河でバタフライ』 たかのてるこ 2001 アメリカ同時多発テロ 2002 『旅行者の朝食』 米原万里 2003 イラク戦争、SARS流行 冬ソナブーム 2007 オーストラリアのLCCジェットスターが日本路線就航 『日本を降りる若者たち』 下川裕治 2008 リーマン・ショック 2009 『インバラの朝』 中村安希</p>
<p>2010年代 旅本模索の時代へ</p> <p>時代を魅了する新しい 旅の本は登場するか?</p>	<p>2011 3.11東日本大震災 福島原発事故 アラブの春 2012 『世界しあわせ紀行』 エリック・ワイナー 2014 イスラム過激派組織「ISIL」、国家樹立宣言 『TRUE PORTLAND』 BRIDGE LAB 2015 『The Songlines ソングライン』 竹沢うるま</p>

特集あとがき

公益財団法人日本交通公社 観光文化情報センター長／旅の図書館長
久保田 美穂子

「旅の図書館」の移転・リニューアルを記念して、本誌「観光文化」でも「旅の図書館」らしい特集企画に挑戦しようということになったのは2016年（平成28年）1月のことです。

特集1でも述べましたように、今回の移転・リニューアルは、右から左へという単純な移転ではなく、複数の課題に挑む新しい図書館づくりプロジェクトでした。蔵書については、収蔵方針の変更に伴う全収蔵図書の見直し、調査研究部門の資料室との資料データの統合、新しい独自分類の構築を行いました。また、図書館単体の建物とは異なり、新社屋は図書館と研究部門が共用し、建物全体を観光研究のネットワーク拠点としたいと考えたことから空間構成は複層的なものとなり、サイン、動線、利用・運営の計画づくりから什器^{じゅうき}選びに至るまで、コンセプトを一つ一つの形にするための膨大な時間が必要でした。

本特集は、こうした移転・リニューアル開館と時期が重なりましたが、企画と準備、執筆には苦労がありました。特徴的な蔵書と図書のある空間の価値を再認識し、再編集し、活用いただくための発信を行うことが重要と考え、今だからこそこの想いで取り組みました。

まず特集1は、リニューアル後の「旅の図書館」のコンセプトと特徴をまとめ、利用についてご案内したもので、続いて特集2で、新しい収蔵方針と独自分類に沿って蔵書を詳しく整理して紹介しています。当館の蔵書を実際に研究活動の中でご利用いただいている東京国立近代美術館の木田拓也氏と高崎経済大学の^{たかもと}大野正人氏にメッセージもいただきました。

特集3は、「観光の研究と実務に役立つ」という新しい「旅の図書館」のコンセプトに沿って考えて企画した「一度は読みたい観光研究書&実務書100選」です。選定結果に関しては過不足他ご批判もあろうかと想像しましたが、「他に類するものがなく、まずは私たちが発信してみよう」と考え実行したものです。どうぞ「旅の図書館」までご意見をお寄せください。いずれホームページなどで、皆様から寄せられたご意見やレビューなどをご紹介するコーナーができたかと考えています。

特集4では、地域の図書館に関し

て観光・まちづくりの視点から考察しました。近年、各地の図書館はそのあり方を模索し、さまざまな取り組みを進めています。伊那市立高遠^{たかと}町図書館の「高遠ぶらり」は、市民はもちろん市民以外の人をも巻き込んだ活動に発展していますが、図書館として資料のデジタル化を目的としたのではなく、その先の活用を念頭に置いていたという構想に驚かされます。奈良県立図書情報館でも、図書館にある情報の魅力や面白さに気づいた市民がその気になり、行動しています。

当財団の調査研究部門はこれまで、観光を通じた地域の活性化に関するさまざまな調査研究活動、コンサルティングを行ってきました。「旅の図書館」としても、今後各地の図書館と観光・まちづくりとの関わりには注目し、果たせる役割について探りたいと考えています。

最後に特集5では、旅行作家の荒木左地男氏に旅心を誘う旅の本について分析し紹介していただきました。旅行需要を刺激する存在としては、

特定の地域を舞台にした映画やドラマ、小説なども多くの旅人を生んできたと言えますが、ここでは旅そのものへの憧れをかき立てる本を中心に、時代とともに変遷してきた旅のスタイルについて振り返っていただきました。特集3に挙げた観光研究や地域研究の本とは趣が異なりますが、観光を扱う研究者や実務家にとって、やはり知っておきたい、読んでおきたい本です。

さて、情報はこのように文字となり冊子となり、インターネットを通じてあつという間に伝わっていく時代となりましたが、その一方で、実際に図書館という空間に身を置いた時にしか得られない知覚、感覚というものも確かにあり、その価値への関心が高まっていると感じています。探したものももちろんですが、探していないものとも出会ったため、どうぞ「旅の図書館」へ足をお運びください。

(くぼた みほこ)

■ リーフレットで振り返る「旅の図書館」のこれまでとこれから

 <p>1982.10~</p> <p>蔵書1万4000点。国内と海外に大きく分かれ、日本交通公社出版事業局発行の雑誌、書籍が全部、国土地理院の地図が揃っていることが謳われている。</p>	 <p>1981.10~</p> <p>蔵書1万4000点。新聞雑誌120種類。この年、閲覧席は18に増えた。レファレンスは祭り・行事を含めた観光資源に関するものが多かった。</p>	 <p>1980.10~</p> <p>蔵書1万4000点。新聞雑誌100種類。1月には来館累計3万人に到達。</p>	 <p>1979.10~</p> <p>1978年10月開館時の蔵書4000点から1年で蔵書1万点に。閲覧席数が12席という規模だが、8月には来館累計1万人に。まだ喫煙可だった。</p>		
 <p>1998.9~</p> <p>蔵書が2万5000点に。1999年、名称を「旅の図書館」に改称。</p>	 <p>1997~</p> <p>蔵書1万9000点。5月には来館累計50万人に。</p>	 <p>1995.4~</p> <p>蔵書1万8000点に。1996年第一鉄鋼ビルから第一鉄鋼ビルへ移転。</p>	 <p>1991.11~</p> <p>蔵書1万7000点。閲覧24席。7月来館累計30万人。1994年6月来館累計40万人。</p>	 <p>1989.1~</p> <p>蔵書1万7000点。1988年図書管理システム稼働。土曜日が休館日となった。</p>	 <p>1983.10~</p> <p>蔵書1万4000点。来館累計1984年5月10万人。1987年2月20万人。1985年、全館禁煙。</p>
 <p>2016.10~</p> <p>南青山の日本交通公社ビル内に移転。蔵書6万点。</p>	 <p>2012~</p> <p>4代目のリーフレット以来、久々の4色化。2012年第一鉄鋼ビルから八重洲タイヒルへ移転。</p>	 <p>2010.9~</p> <p>一般用リーフレットと研究者用リーフレットに分けて制作。蔵書3万2000点。</p>	 <p>2008.1~</p> <p>蔵書3万点。</p>	 <p>2007.5~</p> <p>蔵書3万点、デジタル画像用PCが追加され、CD-ROM用PCが廃止された。</p>	

JTBFモバイル観光客アンケート による地域の健康診断の実践

公益財団法人日本交通公社 観光地域研究部 主任研究員 中島 泰



今年度より、当財団ではモバイル端末を活用した新たなアンケートシステムを開発し、複数の観光地で運用を始めています。このシステムを観光地単位で導入することで、従来よりも簡便にアンケートを設計・実施することが可能となり、アンケート結果についてもリアルタイムに把握することができるようになりました。アンケートは単発で実施して終わりではなく、継続的に実施してその経過を見ながら観光地づくりの取り組みにフィードバックしていくこ

図1 調査実施フロー



とが重要です。現在、本システムを活用することで、全国の観光地の健康維持(持続的な発展)に向けた支援を進めています。

● JTBFモバイル観光客アンケートの特徴

本システムでは、観光客の旅行内容や満足度などについて、実際に観光地を訪れた観光客に対してアンケートを実施することで把握します。調査は、観光客が集まる観光案内

所や駅・空港などで実施し、ポスター掲示やチラシ配布によって観光客にアンケートを実施していることを周知、観光客に自身のモバイル端末(スマホ、タブレット、モバイルPC)を使って回答してもらいます(図1)。観光地側で必要なことは、主に「① 観光地内の調査地点の決定と協力依頼」「② 観光地内の調査状況の把握、管理」の2点です。把握する内容(調査項目)の例は、図2の通りですが、観光地それぞれのニーズに合わせて自由にオーダー

メイドが可能です。

従来、調査員による聴き取りや調査票の留め置き(後述)によって実施していたアンケートを観光客自身がモバイル端末を用いて回答する方式にしたことで、調査員の人件費や紙の調査票からのデータ入力にかかる費用が省かれ、大幅に調査コストを削減することが可能となりました。また、調査日を限定する必要がないため、季節別の観光客の特性を把握できる他、回答結果がリアルタイムにデータベースに反映されるため、今日の結果を今日すぐに確認することができます。加えて、本システムは外国語にも対応しており、近年急増する外国人観光客の動態・意向把握にも活用することが可能です。

●観光客アンケートから見えてくること

観光地が健康に長生き(持続的に発展)するためには、ヒトが定期的に健康診断を行い身体の調子を確認のとるように、観光地用の健康診断を受けることが必要となります。

す。その診断項目は「利用面」「居住面」「経済面」「環境面」の4側面、4側面の状態をデータで把握し、その結果から必要に応じた対策をとることが重要だとされています(注1)。

そのうち「利用面」は、「観光客に愛され続ける観光地になっているか」を測る複数の計測項目から成っており、そのデータを観光客アンケートによって収集します。

観光客アンケートで把握すべき項目については、観光庁の「観光地の魅力向上に向けた評価調査事業」において5つに整理分類されています(図3)。これまでの研究の中で、観光客に愛され続ける、つまり観光客数を中長期的に維持するためには、観光地の魅力を向上させ、「満足度(CS)」と「紹介意向・再来訪意向(ロイヤリティ)」を高めていくことが大切だと分かってきました。

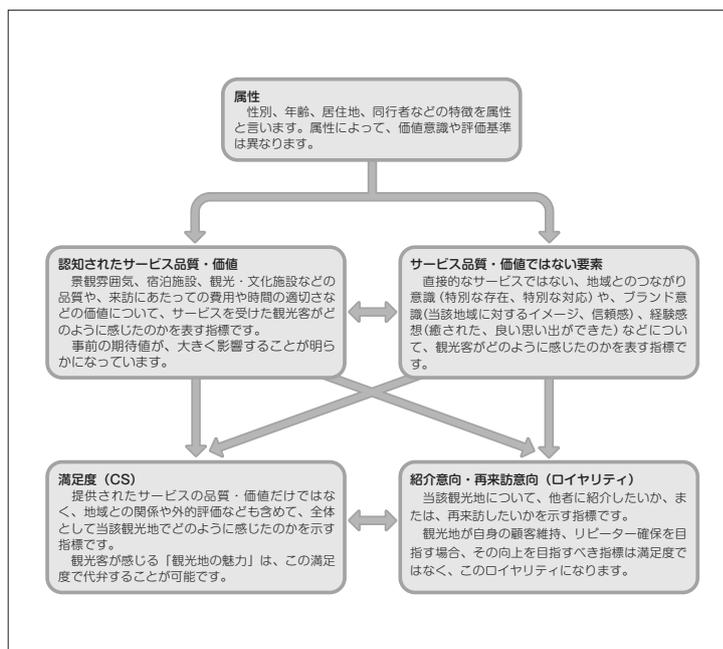
そこで当財団では、観光客アンケートの実施を通じて、「①その観光地がどのように評価されているのか」「②どの属性が、何に満足して、何を不満に思っているのか」といっ

図2 調査項目の例

旅行実施の内容	
■同行者	■同行人数
■来訪回数	■前回来訪時期
■滞在日数	■宿泊先
■訪問スポット	■体験内容
■地域内移動手段	■旅行会社利用有無
■消費額(宿泊、交通、土産、飲食)	
旅行に関する感想・意識	
■旅行目的	
■旅行の総合満足度	
■旅行の個別満足度(景観、飲食、土産、移動、情報)	
■宿泊施設の満足度(客室、風呂、食事、決済、通信)	
■特に満足したこと(自由記述)	
■特に不満だったこと(自由記述)	

※調査項目は地域のニーズに合わせてオーダーメイドが可能です。

図3 観光客アンケートで把握すべき主要5分類



出典：観光庁ホームページ「観光客満足度調査のススメ」
(<http://www.mlit.go.jp/common/000118451.pdf>)

図4 観光地の持続的な発展を支える4側面



た現状の評価に加えて、「③各属性の満足、不満を左右している要素は何なのか」といった要因分析、それらを踏まえた「④観光地の短期・中期・長期における行動計画の策定」に対する支援を行っています。

また、前述の通り、観光地の持続的な発展のためには、観光客の「利用面」のみならず、「居住面」「経済面」「環境面」も合わせた4側面がバランスよく望ましい状態に保たれていることが重要となります(図4)。そのため本アンケートシステムを活

用・進展させ、観光客以外の3側面のデータについても収集・整理し、観光地のより総合的な健康診断カルテを作成することで、観光地の持続可能な発展につなげていくことが、最終的な目標となります。

●従来のアンケート手法

観光客アンケートの種類は、主に「着地調査(観光地で回答する調査)」と「発地調査(旅行から戻った後に自宅で回答する調査)」に分かれます。

JTB Fモバイル観光客アンケートは着地調査になりますが、当財団では毎年、発地調査による大規模な調査も実施しています。それは、JTB F旅行実態調査²⁾と呼んでいるもので、全国数千人を対象にインターネットアンケートを実施し、過去1年間にどのような国内旅行、海外旅行を実施したかを調査しています。この調査は当財団で継続的に実施しているもので、日本人の旅行内容が中長期でどのように変遷しているかを把握、毎年『旅行年報』誌上と「旅行動向シンポジウム」におい

てその結果を公表しています(注2)。発地調査では、よりサンプリング(調査対象者の絞り込み)が行いやすいため、市場全体の傾向を捉えるのに適しています。

一方、着地調査は、より観光地ごとの事情に合わせたカスタマイズがしやすいことが特徴です。観光地(地方自治体、観光協会など)が主体で実施する観光客へのアンケートの多くは、着地調査で観光客に同観光地を訪れた感想や行った活動の内容を聴くものとなっています。

次に、着地調査を行う手法としては、これまで「聴き取り調査」と「留め置き調査」が主に用いられてきました。聴き取り調査は、調査員数名を観光スポットなどに配置し、調査員が観光客に声をかけて協力を依頼するものです。一方、留め置き調査は、調査票を観光案内所や駅・空港などに設置し、ポスターやのぼりなどで告知することで観光客の自主的な回答を促すものです。一般的に、観光客の傾向は季節によって大きく異なるため、四半期ごとのデータを手入することが望まれます。また、経

年で実施することで、観光客の嗜好がどのように変化しているのか、観光地の変化がどのように受け止められているのか、についてを把握することも重要です。つまり、小まめに継続して観光客アンケートを実施していくことが重要となるのですが、それを実現するにはコスト面も含めて1回当たりの調査が重くなりすぎないよう、観光地が自律的にアンケートシステムを継続していけるような仕立てにしておくことが重要です。回収サンプルの質だけを見れば、聴き取り調査を季節、平日・休日などに分ける形で年間複数回、それを継続的に実施していくことが理想的です。ただしコストがかかるため、それが実現できる観光地は限られてきます。そこで、留め置き調査などをうまく組み入れてきたのがこれまでのアンケートの取り方になっています。

JTB Fモバイル観光客アンケートでは、聴き取り調査と留め置き調査の課題をうまくカバーした上で、安価にアンケート調査を実施することを目的としました(表)。特に、

表 着地調査の各手法の特徴

	JTBFモバイル観光客アンケート	聴き取り調査	留め置き調査
回答方法	観光客が自身のモバイル端末からアンケート専用サイトにアクセスし、自入力で回答	調査員が観光客に声をかけて依頼、調査員が聴き取りをしながら回答	調査票を設置し、ポスター・のぼり等で誘導し、観光客自身が自記入で回答
実施期間	○	△	○
	期間を定めず連続して実施が可能	特定の調査日を設定し、調査員等の手配を行う必要がある	期間を定めず連続して実施が可能
調査設計	○	△	△
	設問の変更は随時可能	紙調査票の場合、印刷後の変更は難しい	紙調査票の場合、印刷後の変更は難しい
結果表示	○	△	×
	回答後、リアルタイムにクラウド上に回答データが蓄積、確認が可能	紙調査票から入力作業を行い、データ化する時間が必要となる	調査票の回収および紙調査票からの入力作業によってデータ化する時間が必要となる
コスト	○	×	△
	比較的低価格で実施可能	調査員手配およびデータ化においてコストがかかる	データ化においてコストがかかる
回収サンプル	△	○	△
	回答者がスマホ、タブレット等でアンケート専用サイトにアクセスできる人に偏る	ルールを決めておくことで、調査員がルール通りのサンプルに声をかけることが可能	観光客の自主的な回答によるため、サンプルが偏る懸念が出る、また回答が集まらないケースがある

これまで予算がない、あるいはノウハウがないといったことで観光客アンケートを諦めていた比較的小規模の観光地が継続して自律的に調査を実施していくことを目指した設計としています。

●問い合わせ先

JTBFモバイル観光客アンケートに関するお問い合わせは以下までお願いします。気になること、不明点、より詳細な内容が知りたいなどありましたら、お気軽にお問い合わせください。

観光地域研究部

担当：中島（なかじま）

メール：nakajima@jtb.or.jp

FAX：03・5770・8359

（なかじま ゆたか）

〔注〕詳細は、当財団ホームページにおける「観光地における持続可能性指標に関する研究」紹介のページを参照ください
(<https://www.jtb.or.jp/research/sustainable-tourism-pros>)

〔注〕今年度の『旅行年報』は10月発行予定、「旅行動向シンポジウム」は11月実施予定。なお、『旅行年報』の内容は当財団ホームページにおいても公開しています。
(<https://www.jtb.or.jp/publication-symposium/annual-report/>)

活動報告

観光政策研究部

「平成28年度観光地経営講座」を開催

当財団は長年、観光・地域振興に携わる行政のご担当者、観光関連団体や観光関連事業者などの方々を対象として、観光についての基礎的な知識を当財団研究員が体系的に解説する「観光基礎講座」と、全国各地で先進的な取り組みをされている実践者や専門家を講師としてお招きして、より現場に即した実践的な知識やノウハウをお伝えする「観光実践講座」を開催してきました（いずれも2日間、当財団にて開催）。

平成26年度にこれら二つの講座を統合し、「観光地を経営する」という観点で基礎と実践の両面から観光について深く学ぶ講座「観光地経営講座」を開設しました。テキストは、

当財団のこれまでの調査研究の成果をもとに、観光地経営に必要な8つの視点をまとめた『観光地経営の視点と実践』（2013年、丸善出版）を使用します。

今年度は「滞在化」をテーマに開催

本講座は、毎年その時の旬のテーマを取り上げ、当財団研究員が課題認識や現状、今後の方向性の考え方などについて解説を行うとともに、その分野の実践者・専門家から、ご自身が携わる取り組みを事例として、抱える課題や、それらへの対応策として成功したことや失敗例、今後の展望などについてお話しいただきます。

今年度は、「地域の視点で『滞在化』を考える」地域が取り組むべき課題と解決に向けたヒントを探る」をテーマに、2016年（平成28年）6月23日（木）から24日（金）の二日間、当財団会議室にて開催しました（表・開催概要）。

「滞在化」と言っても、地域特性によって多様な形態があり、地域側に求められる対応策もさまざまです。そこで本講座では、全国各地からの受講者の多様な課題認識に込められるように、リゾート地、温泉地、都市といった幅広い地域の事例を取り上げることになりました。具体的には、スキーリゾート（倶知安町）、高原リゾート（軽井沢町）、温泉地（別府市）、そしてまちなかの空き家の活用（尾道市）という4つの事例を取り上げ、講師として現場での実践者と学識研究者の双方に登壇していただきます。

当日の講義内容の詳細については、別途まとめる「講義録」を参照いただけたいと思いますが、各事例から滞在の目的となり得る快適な環境・景観をどのように形成・維持するか、滞在プログラムをどのように充実さ

せるか、宿泊施設との連携のあり方、地域外からの滞在客、特に外国人旅行者が増えること、地域コミュニティへの影響など、非常に多くの示唆をいただきました。

二日間の講座の最後に、事例をご紹介いただいた4人の講師と、滞在先として温泉地を研究対象としている有識者をパネリストに迎えた総括ディスカッションを行いました。この場で各事例を横並びで見ること、滞在化に求められる事柄についてより深く掘り下げて学ぶことができ、受講者からも活発に質問や意見が出されました。

受講者の理解をより深めるために「コメンテーターとファシリテーター」が解説

今年度は新たな取り組みとして、外部講師に一人ずつ当財団の研究員がコメンテーターとして付きましました。これは、講師のお話をより深く引き出して受講者へ分かりやすく伝えるとともに、研究員自らが培った知見や類似の事例を紹介することなどにより、受講者により深く各事例について理解していただくためです。



担当研究員は講師の方々と事前に、この講座の目指すところや講師のお話から学びたいポイント、研究員自身の問題意識などについて何度もやり取りをさせていただき、講座当日に臨みました。

また、講座全体をファシリテーター役の研究員が進行し、講師と受講者との質疑応答を活発に進めるためのコメントや各講義をつなぐ解説を行い、総括ディスカッションの進行

役を務めることなどにより、二日間の講座が多くの学びを得られる場となるよう努めました。

少人数での開催ゆえに受講者同士の交流も容易に

本講座は定員が24人と少人数であることが一つの特徴です。講師と受講者の距離が近いので、自然と講義後の質疑応答も活発になり、初日の夕方の意見交換会では、少人数ゆえにより深く課題を共有し、お互いのノウハウなどを伝授することも可能です。このようなつながりが、講座終了後に相談をしたり地元の仲間と視察に出掛けたりといった、地域を越えたネットワークづくりにつながることもあるようです。こうしたことも、日頃の業務を一時離れて、同じ課題認識を持つ人々が集まる研修に参加することの一つの意義ではないでしょうか。

なお、今年度は、行政や観光関連団体の方々に加えて、大学や研究機関で観光について研究し、若手や地域にその成果を伝えている教員や研究員の方々の受講が比較的多かったことが特徴でした。

表 平成28年度 観光地経営講座 開催概要

- ◎テーマ：地域の視点で「滞在化」を考える
～地域が取り組むべき課題と解決に向けたヒントを探る～
- ◎開催日時：平成28年6月23日（木）10:00～17:10 6月24日（金）9:00～16:15
- ◎場所：公益財団法人日本交通公社（JTBF）大会議室
- ◎対象：観光による地域振興に携わる地方自治体のご担当者、観光関連事業・商工会議所などのご関係者
- ◎主催：公益財団法人日本交通公社
- ◎プログラム
 - 講義1 観光地経営の視点と実践（JTBF理事・観光政策研究部長 梅川智也）
 - 講義2 旅行市場の動向と滞在化（JTBF観光政策研究部主任研究員 牧野博明）
 - 講義3 滞在型リゾート「ニセコエリア」の現状と課題（倶知安町議会議員 田中義人氏）
 - 講義4 老舗別荘地・軽井沢 快適な滞在ライフを支える環境整備のあり方とは（軽井沢町教育委員会 教育次長 森憲之氏）
 - 講義5 暮らすように過ごす、まちの魅力が促す別府の滞在スタイル（NPO法人BEPPU PROJECT 代表理事 山出淳也氏）
 - 講義6 尾道ですすむ、まちなかの資産（空き家）を活用した滞在化の取り組み（東京工業大学 准教授 真野洋介氏）
- 総括ディスカッション
（千葉商科大学 准教授 内田彩氏、田中氏、森氏、山出氏、真野氏、JTBF梅川・岩崎）

2016年8月、当財団は南青山の新社屋へ移転しました。これにより、これまでよりも研修会場を広く確保でき、より快適な環境で研修を開催できることから、「観光地経営講座」も新たな形を模索してみたいと考えています。観光についての体

系的・実践的な知見を提供し、受講者の皆様にとって具体的なアクションにつながるヒントを得られる場となることを目指しておりますので、今後ともご注目ください。

（主任研究員 岩崎比奈子）



連載 I
当財団専門委員
私の研究と観光
第 6 回

自然保護地域における保全と利用

公立大学法人国際教養大学 アジア地域研究連携機構 機構長・教授 熊谷 嘉隆

自然保全と利用

筆者の専門は「自然保護地域の管理運営」である。具体的には国立公園などに代表される自然保護地域内の景観・生態系保全と登山・ハイキング、溪流釣りなどのアウトドアレクリエーション利用をどのように両立させるのか、を勉強している。

きっかけ

30年以上前の話になるが筆者は中部山岳国立公園内の槍ヶ岳から燕岳を結ぶ通称、表銀座の中間地点にあるヒュッテ西岳に勤務していた。山小屋の仕事は登山客の食事の準備、布団干し、ゴミ・尿尿処理、登山道の整備・保守、遭難時の初動対応、など多岐に渡り貴重な体験を積んだのだが、その際、考えさせられたのは「登山者の満足」と「登山者による環境負荷」として「自然保護地域の管理運営のあり方」であった。繁忙期ともなれば上高地もしくは燕岳から槍ヶ岳を目指す登山者で山小屋は常に満員である。ちなみに山小屋に「定員」というものは無く、天

候が崩れば無制限に登山者を受け入れる。当時、ヒュッテ西岳の定員は86名であったが、筆者在職中、1日110名ほどの登山者の宿泊を受け入れたことがある。その際、登山者は一畳ほどの布団に3名（一人ずつ頭と足を交互）就寝する。山小屋寝室内は雨風による湿度、登山者の汗で蒸せており、快適さとは程遠い環境で熟睡など不可能である。しかしこのような状況下でも登山客から不満や文句ができることは一切なく、翌朝には多くの宿泊客が我々に感謝し小屋を後にする。また、混雑は山小屋だけでなく、槍ヶ岳の肩から山頂に向かうルートは長蛇の列となり、本来30分もあれば登れるところを混雑時には3倍以上の時間がかかる。登山者は辛抱強く順番を待ちながら山頂を目指し、そして人とすれ違ひながら鎖場を下山するのである。多くの登山者は多大な時間とお金を使って雄大な山岳景観と静寂、そして原生的体験を期待して入山するのであるが、現実には山小屋と登山道の混雑、そして静寂とは程遠い体験を余儀なくされる。しかし、多くの登山者は翌年以降も似

たような山行をするのだが、筆者はこのような登山者における「期待と現実のギャップの克服」の心理的メカニズムに興味をもった。

山小屋のゴミ・尿尿処理であるが、可燃物はドラム缶をくりぬいた簡易焼却炉で従業員が黒い煙を出しながら焼却し、燃えかすは山小屋敷地内に埋める。尿尿処理は小屋閉鎖の直前10月最終週に便所のタンクに1シーズン分溜めたものを掻き出し、消毒剤と共に谷に一齐に流すのであった。（現在は二つとも行われていない）。登山者に休息と安全を提供する山小屋は一方でこのような環境負荷の源にもなっていたわけで、これらの観察・経験が「自然保護地域の管理運営のあり方」を考えるきっかけになった。

山小屋勤務の後、世界中から多くの登山隊とトレッカーを魅了するネパールヒマラヤのアンナプルナとエベレスト方面（国立公園地域）に行く機会があった。雄大な景色と途上の集落のたずまいや人々の民俗文化に触れながら、2ヶ月余りを山中で過ごした。そこで目にしたのは登山者やトレッカーが地域にもたらす経済波及

効果とそれを基に整備した学校、病院、橋、道路といった社会インフラの充実、観光産業に携わる人々と一般住民との意識・生活様式、生活水準の乖離、異文化と遭遇することによって影響を受けた若者達の伝統的生活様式への眼差しの変化、登山者・トレkkerを支える薪・水の確保と食料増産の為の森林伐採や開墾地の開拓といった環境負荷、などであり、この観察・体験も当該分野の研究に進むきっかけになった。

留学

1990年より米国の州立モンタナ大学・森林学部アウトドアレクリエーション学科で自然保護地域の管理運営を学ぶため渡米した。今でも印象に残っているのがこの学科専攻生の必修であるIntroduction to Outdoor Recreation Managementの講義初日に担当教員が「アウトドアレクリエーション管理運営において最も大事なのは利用者の満足 (User satisfaction) をどう高めるかである。」との指摘であった。当初、この分野において一番重要なのは自然保全であると信じていた筆者にとつて、これはショックであった。勉強を進めるうちに「利用者の満足」はその人の心身の健康、創造的仕事、家族・友人との絆の深化、豊かな人生、等の社会福祉政策にも寄与し「満足した利用者」を増やすことによつて自然保護地域の社会・政策的意義がより広く認知され、ひいては当該分野の継続的予算の確保に繋がり、それが健全な自然保護地域管

理運営にも資する、との循環図式が見えてきたのである。また、「利用者の満足」は多様な利用者に応える「多様な機会」が自然保護地域内で提供されていること、利用者による環境負荷は利用者数のみが説明変数でなく、利用類型、利用者のマナー、利用の季節・タイミング、利用地の社会的・生態的特性、などの要素が相互に絡み合つて変動すること、などを学んだ。

今、そしてこれから

アメリカ留学と研究生生活を2004年に終え、現在の職場に奉職した。帰国当初は当該分野の「先進地」で学んだことを我が国の自然公園に応用する、と意気込んでいたが、その法制度、土地所有、ガバナンス、管理運営執行可能各種資源等において事情が異なる我が国での直接的応用は非現実的であると認識せざるを得ず、まずは謙虚に勉強しなおそうと決意した。帰国直後の2004年に国立公園研究に携る国内有志と共に「自然公園研究会」を立ち上げ（現在、事務局はJTBF）、今まで、この研究会メンバーが中心となつて、我が国の地域制自然公園の有効性評価や協働型管理運営のあり方（環境省主催の検討委員会、沖縄県の観光収容力の検討（沖縄県主催、JTBF共催）、自然保護地域の評価計画、管理、合意形成手法の開発（環境研究総合推進費）などのプロジェクトを推進してきた。これらの研究に一貫している問題意識は「自然保護地域における保全と利用（主に観光行動）の

バランス」である。

現在、我が国では「明日の日本を支える観光ビジョン」に基づき国立公園をグローバルスタンダードで見直し、より多くの国外観光客を魅了するための「満喫プロジェクト」が進められている。ここでも今までの経験値を活かして国立公園の単なる観光地化ではなく「保全と利用のバランス」の図られた世界水準の「ナショナルパーク」化を目指し、関係者と意見交換を図りつつ研究成果を施策に反映させればと思つている。

（くまがい よしたか）



熊谷 嘉隆（くまがい よしたか）

1960年生まれ 札幌市出身。公立大学法人国際教養大学アジア地域研究連携機構 機構長・教授。1997年モンタナ大学森林学部大学院自然公園管理専攻修士課程修了、2001年オレゴン州立大学森林学部森林資源学科森林社会学専攻博士課程修了。ワシントン州立大学農業家政学部自然資源科学科博士研究員、2004年から国際教養大学国際教養学部 基礎教育 社会科学 助教授、2007年教授。2014年より現職。国際自然保護連合・世界保護地域委員会副委員長―東アジア地域担当/日本委員会委員長を兼任。主な著作に『グリーン・ツーリズムの活動の展開と地域住民気質の変容―北秋田市阿仁地区の事例から』年報村落社会研究43号(2006)、『No Need to Reinvent the Wheel: Applying Existing Social Science Theories to Wildfires In People, Fire and Forests. Oregon State University Press (2013)』



連載Ⅱ
当財団専門委員
わたしの1冊
第6回

一橋大学大学院 商学研究科 教授

根本 敏則

『津軽』

太宰治著

「津軽」は故郷へ旅する愛（かな）しさを疑似体験できる1冊である。

太宰は津軽の大地主である津島家に生まれた。弘前高校時代に芸者遊びを始めてHと親密となった他、マルクス主義にかぶれて津島家の横暴を告発する小説を書いている。高校卒業後に東大仏文科に進学し、Hを東京に呼び寄せ同棲を始めた。並行して政治活動にも参加したが、手段を扒ね政治活動に絶望し脱落する。その後、心中未遂を起こしたり、縊死を企て失敗したり、薬物中毒になったり、Hと心中未遂後に離婚するなど生活は荒んでいく。しかし、御坂峠での長期滞在中に出会ったMとの結婚を契機に心身ともに健康となり、「津軽」など今日においても高く評価される多くの小説を執筆することとなった。

私も生まれ育ちは津軽である。新制弘前高校を卒業後に上京し東工大社会学科に進学した。入学直前に陰湿な浅間山荘事件があり、キャンパスには政治活動に興味を持つ学生は少なくなっていた。太宰ほど過激に人生を送れるはずもないのだが、大学在学中に津軽に残したAと遠距離交際をし、大学4年次に求婚するも、あっけなく断られる。自意識過剰だったので大きく傷つくわけだが、1か月もすれば別の女子学生に言い寄ったりしている。結婚のため卒業直後の就職

を考えていたが、その必要はなくなった。少しずつ標準語で論文を執筆する楽しさも分かってきて、大学院に進学することとなった。

太宰は上京してから故郷に帰っていないが、今回、十数年ぶりに津軽を旅行した。太宰は津軽が好きである。いや、正確には津軽は故郷なのだから理想的存在で居続けなければならぬ。したがって、太宰の美意識にそぐわない風景は容赦ない罵倒を受けることになる。しかし、母親代わりに育ててくれた女中のだけは別格である。たけは母であり、太宰の身体そのもので批評の対象にならない。その時に交わしたたわいもないやり取りを書くしかない。ところが、それで充分である。たけと会い、太宰は自分も津軽人であることを確認できたのである。

今、私は五能線のリゾートしらかみの車中にいる。この「撫（ぶな）」と名付けられた新型車両に乗り込んだ時には、都会人に媚を売っているようで落ち着かないと思ったわけだが、バーカウンターでは酒をいくら注文してもかまわないという。きつと飲まない家から配給酒を集めてきたに違いない。前言撤回。この車両、目を見張るほど小綺麗で、普請も薄っぺらではない。しかし、それにしてはだんだん酔いが回ってきた。あと少しで弘前だ。Aに会えるはず。「今行くはんで、待ってでける。」（ねもと としのり）



根本敏則（ねもと としのり）

一橋大学大学院商学研究科教授。1981年東京工業大学大学院理工学研究科社会学博士課程修了。スウェーデン道路交通研究所客員研究員、フィリピン大学交通研究所客員教授、一橋大学商学部教授を経て2001年から現職。2002年04月～2003年03月はプリティシユコロンビア大学交通研究センター客員研究員。日本物流学会会長、日本計画行政学会会長、世界交通学会学術委員会委員などを歴任。近著に『現代交通問題 考』（共編著）成山堂書店、『ネット通販時代の宅配便』成山堂書店、『自動車部品調達システムの中国・ASEAN展開～トヨタのグローバル・ロジスティクス』（編著）中央経済社など

公益財団法人 日本交通公社 出版物のご案内

当財団では、調査・研究の成果を出版物として公開しています。ここで紹介している本はオンライン書店のアマゾン (amazon.co.jp) で POD (プリントオンデマンド印刷) の出版物として発行しています。

旅行年報 2016 (2016年10月中旬発行)

1978年創刊の年報。観光に関する各種統計資料および当財団独自の調査結果をもとに、おおむね過去二年間の動向を概観しています。「日本人の旅行市場」「訪日外国人旅行」「観光産業」「観光地」「観光政策」の5編と「観光研究」「旅行年表・付属統計表」で構成。旅行・観光の動向分析に、全ページ、ホームページで公開 (2016年10月中旬)。A4判200ページ/本体価格2000円+税



旅行産業論 (2016年2月発行)

立教大学、(株) JTB総合研究所、当財団を中心に構成される「立教大学観光学部旅行産業研究会」。その研究会が、立教大学の講義内容をベースとして旅行業の体系的な整理を行い、書籍化したものです。実務的内容にとどまらず、旅行業全体を学術的かつ俯瞰的視点から解説しています。A5判



218ページ/本体価格2000円+税

平成27年度観光地経営講座 講義録 (2016年3月発行)

今回は「市場創出」に焦点を当て、特にアジアを中心とするインバウンド市場への対応について学びました。その中から国土交通省観光庁国際観光課外客誘致室長の佐藤久泰氏「我が国のインバウンド政策について」、岐阜県観光国際戦略顧問の古田菜穂子氏「地域におけるインバウンド対応策について」、信州白馬八方温泉しろま荘総支配人の丸山俊郎氏「宿泊の現場から見たインバウンドの現状と課題」、NPO法人シクロツーリズム



しまなみ代表理事の山本優子氏「インバウンドの視点からみた自転車旅行の可能性」の4つの講演内容を収録。ホームページでも公開中。※講師の所属・役職は講座開催時のものです。A4判76ページ/本体価格1000円+税

2015年度温泉まちづくり研究会 デイスカッション記録 (2016年7月発行)

「温泉まちづくり研究会」の2015年度の記録です。第1回「黒川温泉の魅力の根源にせまる〜黒川の「ふるさとらしさ」はどこから生まれるのか」。第2回「温泉地と災害を考える (第1部:日本の温泉地と火山活動の現状と予測。第2部:火山と向き合う温泉地の現場から)」。第3回「温泉地の雇用と人材の問題を考える」を収録。



全ページ、ホームページで公開中。A4判100ページ/本体価格1500円+税

当財団からのお知らせ

●2016年度 第26回旅行動向シンポジウム 開催

日時：2016年11月1日（火）・11月2日（水）

我が国の旅行・観光の動向 ～『旅行年報2016』より～

最新版『旅行年報2016』（2016年10月発行）の内容をもとに、「日本人の旅行市場」「観光産業・観光地の動き」「観光政策」「訪日外国人（インバウンド）の旅行市場」の動向について、当財団の独自調査を複数まじえ、執筆した研究員よりご報告いたします。

※本年は10月3日（月）にリニューアルオープンした「旅の図書館」と一体化した当財団ライブラリーホールで実施します。時間など詳細はホームページで順次ご案内させていただきます。 <https://www.jtb.or.jp/>

「研究員コラム」の紹介

当財団のホームページで連載中の「研究員コラム」。その最新10本のリストです。研究員のユニークな“視点”をご一読下さい。毎週月曜日の更新です。

- No. 308 観光研究図書の独自分類から見えてきたこと 大隅一志
新装「旅の図書館」は、“観光の研究と実務に役立つ図書館”を目指しています。その取り組みの一つとして構築したのが観光研究資料の独自分類。その効用と、独自分類から見える近年の観光研究の傾向とは……
- No. 309 男性的なイメージのレジャーと女性的なイメージのレジャー 柿島あかね
初めて競馬場に行く機会がありました。実際に訪れてみると、有名店のスイーツが並ぶおしゃれなカフェでは女性グループやカップルがくつろぎ、パドック周辺はレースに出る馬を見る親子連れで賑わって……
- No. 310 外国人観光客の立場で考えたこと 門脇菜海
とある観光地で地元の方と打合せをしていた時のこと、話題は増え続ける外国人観光客のことに。「ちゃんと話さなきゃって身構えてしまう人が多いんだけど、話せなくても、身振り手振りや表情で十分伝わるんだよね。」この言葉を聞いた私は、一週間前の自分の体験を思い出して……
- No. 311 訪日ビギナー観光客が市場拡大を牽引 ～訪日市場5年間の客層変化を振り返る 川口明子
観光庁が実施している「訪日外国人消費動向調査」が2016年で7年目を迎えました。この調査では、客層の実態調査も同時に行われています。このデータを活用して、2011年から2015年までの5年間にわたる訪日市場の客層変化を見てみると……
- No. 312 ポケモンGOをプレイしてー観光地の動きと今後の可能性ー 川村竜之介
本コラムでは以前に、相澤主任研究員が「位置ゲー」について、吉谷地主任研究員が「仮想現実（VR）・拡張現実（AR）」技術について紹介しました。その「位置ゲー」と「拡張現実」の両者を組み合わせたスマートフォンゲームアプリ「ポケモンGO」が世界中で大ブーム……
- No. 313 観光分野における我が国の国際貢献（その2） 菅野正洋
Asia Pacific Tourism Association (APTA) の年次大会に参加し、研究活動を通して得た知見を発表してきました。前回のコラムで観光分野における我が国の国際貢献やプレゼンス向上の可能性に関して述べましたが、今回も同様に所感を述べてみたいと思います。
- No. 314 38年前の「旅の図書館」パンフレットから 久保田美穂子
キャビネットの奥から、発行順に整理された昔の図書館パンフレットが出てきた。古地図や古代美術の彫刻写真を表紙に使った格調高い雰囲気に興味を惹かれ開いてみると……
- No. 315 「国立公園」と「世界遺産」、どちらが人気？ 五木田玲子
環境省が進めている「国立公園満喫プロジェクト」は、日本の国立公園を世界水準の「ナショナルパーク」としてブランド化することが目的。7月には、訪日外国人を惹きつける取組を先行的・集中的に実施する8つの国立公園が選定されました。ところで、「国立公園」は諸外国において、日本人にとって人気のキーワードである「世界遺産」と比べて、どのような位置付けなのでしょうか。
- No. 316 まちづくりと観光事業の間にある壁⑥ 後藤健太郎
本コラムでは、「観光まちづくり」をあえて“まちづくり”と“観光事業”の二つの側面に分けて、「まちづくりと観光事業の間にある壁をどう乗り越えるか」を大きなテーマとしたいと思います。「例えば京都市と比べると全部負ける」。今回は川端五兵衛氏のこの言葉を通して、まちづくりと観光について改めて考えたいと思います。
- No. 317 自動運転車が変わる観光の未来 塩谷英生
2013年の秋に行った自主調査で「これからの国内宿泊旅行市場が拡大していくために 必要性が高いと思う施策を選んでください」という質問をした（対象は全国の旅行好きで発信力のあるオピニオンリーダー層）。結果は……



Cover Story

和歌の浦の美しい光景を万葉歌人の山部赤人が「和歌の浦に潮満ち来れば 渦をなみ 葦辺をさして 鶴鳴き渡る」と見事に詠んでいる。当時の風景が眼前に広がる小高い山から石の不老橋がカメラのファインダーに飛び込んで来て心地よくシャッターを押すことが出来た。

(Photo and Words by 樋口健二)

機関誌

観光文化 第231号

第40巻4号通巻第231号

発行日：2016年10月10日

発行所：公益財団法人 日本交通公社
東京都港区南青山二丁目7番29号
日本交通公社ビル
〒107-0062 ☎03-5770-8350
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：☎03-5770-8360
(観光文化情報センター内)
kankoubunka@jtb.or.jp

編集人：有沢徹郎

発行人：志賀典人

制作・印刷：株式会社 REGION

禁無断転載

ISSN 0385-5554